



KU 九州産業大学美術館
Museum of
Kyushu Sangyo University



博物館が、人々を支える。

M u s e u M

令和6年度 文化庁「大学における文化芸術推進事業」
実施報告書

本事業のねらい・趣旨

我が国は、「不登校児童生徒29万9千人（文部科学省調査）」、「若者のひきこもり65万3千人（15歳～39歳、内閣府調査）」そして「強い不安、悩み、ストレスを感じる労働者82.2%（厚生労働省調査）」と極めて深刻な状態となっている。カナダ、ベルギーなどの医療保険制度では、医療従事者（主に医師）が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館が行う教育プログラムへの参加を薬と同じように「処方」している。また、英国のNHS＝国民保健サービスはロンドン大学と共同し、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムを

地域住民へ提供している。そこで、本事業では、カナダや英国などの事例調査をもとに、「子ども・若者」を含めた地域住民の「メンタルヘルス支援」に向けた博物館浴プログラム開発、そして医療・福祉従事者と地域住民、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、「不登校・若者のひきこもり課題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策＝社会的処方[※]の場となる「博物館健康ステーション」の構築、さらに「博物館浴」による「子ども・若者」を支える地域医療の新たな枠組みを提案する機会としたい。

*博物館浴＝博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

1

本事業の実施概要

- ①博物館リンクワーカー人材養成（人材養成コース）オンライン講座（博物館などの社会資源を地域とどのようにつなげていくかについて、各地域の事例を学ぶ講座）
- ②「子ども学芸員」育成プログラム開発（プログラム開発コース）オンライン講座（博物館などが、地域の子どものための社会的処方[※]の場となるための理論と実践を学ぶ講座）
- ③博物館のリラックス効果に関する「博物館浴」実証実験（全国の博物館・美術館等の協力を得て、参加者への生理測定、心理測定による効果評価の調査）

- ④博物館健康ステーション/ミュージアムカフェ事業（地域住民などを対象に、講座修了生が企画立案する博物館浴プログラムを提供し、地域博物館における居場所づくりの実際を紹介する）
- ⑤海外の博物館関係者、リンクワーカーを招聘したオンライン国際シンポジウムの実施（海外事例の紹介、及び国内外の参加者の交流の場）
- ⑥多言語学習映像資料の制作
- ⑦「博物館浴」の理念を紹介する学習映像資料の制作
- ⑧事業実績映像の制作

2

本事業による人材育成の目標

本事業の目的は、博物館を社会的処方[※]の場とし、「薬」だけに頼らない地域医療の構築を目指すことである。そのためには、博物館コレクションを活用したメンタルヘルス支援プログラム開発と医療・福祉従事者と地域住民、そして博物館をつなぐリンクワーカー人材育成が鍵となる。こうした人材の育成は、地域に社会的処方[※]の場としての博物館を

増やすと同時に、リンクワーカー自身の「生きがいづくり」「健康寿命増進」に結びつくことになる。さらにリンクワーカーの活動領域が博物館に留まらず、地域の学校や公民館、図書館、保健所等多様な社会資源で、広く活躍できる人材育成も目標となる。

3

本事業の社会的な役割、効果

本事業の社会的な役割は、全国の博物館・美術館等と福祉・医療機関との連携から、「不登校24万9千人」「若者のひきこもり53万人」という深刻な事態の解決に向け、児童生徒や若者を支える「博物館健康ステーション」の構築にある。「博物館健康ステーション」の構築は、「地域の通いの場」として、博物館が新たな価値創造の実現につながり、

児童生徒・若者はもちろん、地域住民のメンタルヘルス支援への効果が期待できる。それは、博物館浴の定量的評価の確立から、「博物館と健康」という新たな医療ビジネス、「文化芸術で稼ぐ」方策研究につながる効果も期待できる。

4

組織体制

実行委員会名簿

委員長 緒方 泉 (九州産業大学地域共創学部・特任教授)
副委員長 三島美佐子 (九州大学総合研究博物館・教授)
委員 西島亜木子 (九州国立博物館・主任研究員)
委員 市川 靖子 (直方谷尾美術館・学芸員)
委員 高田 瑠美 (福岡市美術館・学芸課教育普及係長)
委員 太田 暁子 (福岡市博物館・主査)
委員 小林 善也 (下関市立考古博物館・主任(学芸員))

事務局名簿

事務局長 中込 潤 (九州産業大学美術館・学芸室長)
事務局次長 石川 貴之 (九州産業大学産学共創・研究推進本部事務部長)
事務局員 織田 珠未 (九州産業大学産学共創・研究推進本部・主任)
事務局員 吉田 公子 (九州産業大学美術館・准教授)
事務局員 福岡 加容 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 土屋 和美 (九州産業大学美術館・学芸員)
事務局員 四ヶ所 悦子 (九州産業大学産学共創・研究推進本部・室員)

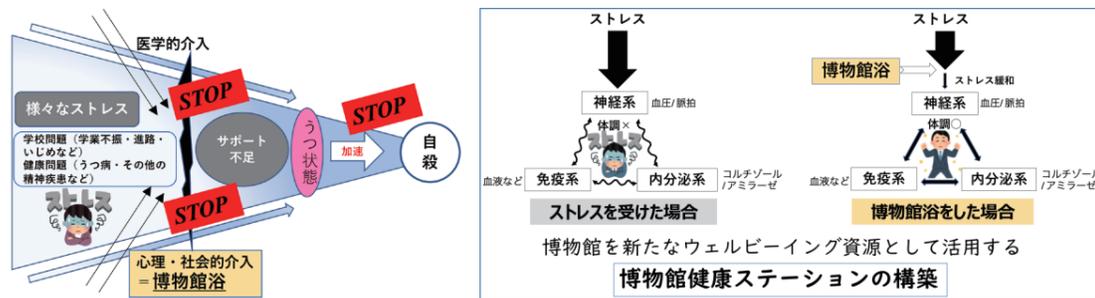
5

「児童生徒の不登校」「若者のひきこもり」課題解決に向けた社会資源を活用した「メンタルヘルス」支援プログラム開発とリンクワーカー人材育成事業の運用構想図

背景

極めて深刻な状態

児童生徒の不登校=29万9千人⁽¹⁾ 若者のひきこもり=65万3千人⁽²⁾
メンタルヘルス支援が大きな課題、リンクワーカー=支え手の育成も重要 (1)文部科学省調査 (2)内閣府調査



本事業の概要

- ① 博物館などの社会資源を活用した「子ども・若者」のメンタルヘルス支援プログラム開発
- ② 「子ども・若者」と医療・福祉機関、教育機関、博物館などをつなぐ地域の「リンクワーカー」人材育成

事業計画



大学・博物館・医療・福祉・学校が協働する 博物館を活用した「子ども・若者」を支える「博物館健康ステーション」の構築

博物館リンクワーカー人材養成講座

オンライン語り場「ミュージアムと地域住民のつなぎ方を考える」という名称で開催

【開催趣旨】

カナダの医師会は2018年11月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、美術館への訪問を「処方箋に書く」取り組みを始めています。医師会とモントリオール美術館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で美術館に入館し、芸術文化の健康効果を楽しめるようにしました。

また、英国のロンドン大学の研究グループは、展覧会やコンサートなどの文化芸術を鑑賞する機会が多い人の方が、全くない人に比べ、死亡率が有意に低いと報告(2019年)、さらに、ウェストミンスター大学のAngela Clow(2006年)やワシントン大学のTer-Kazarian(2019年)は、美術作品を昼休みの短時間に見るだけでも、ストレスの軽減になると報告しました。

現在の日本は、団塊世代が75歳以上になる「2025年問題」に続き、高齢者人口がピークを迎える「2042年問題」や約7人に1人の若者がメンタルヘルス不全を抱えるという、大きな健康課題を抱えています。

地域にある博物館に、できることはないのか？

そこで、本事業では、カナダをはじめ、米国、英国、台湾などの事例調査をもとに、地域住民に向けた「博物館浴」プログラム開発、そして地域住民と博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことで、社会資源の新たな活用方策=社会的処方場の場となる「博物館健康ステーション」運用方策を提案したいと考えます。

今回の連続講座は、「オンライン語り場」と名づけています。毎週金曜日の午後からの90分。地域のミュージアムを活用しながら、地域住民と博物館をつなぐ実践を粘り強く進めている、学芸員、医療・福祉従事者からの話題提供を受け、その後は参加者と共に意見交換を行う「語り場」とします。

こうした「語り場」を通じて、地域の社会教育施設、学校、医療・福祉機関が協働した「誰もが全国5,700ある博物館のリンクワーカー」という、新たな地域人材育成の方策やプログラム開発を考える機会を共に作りましょう。

*博物館浴=博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果の人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

何で、「連続講座オンライン語り場」なのか？

ストレス 孤独 不安
ほっとする90分を 仲間たちと創りたい！
学びたい！ つながりたい！
リラックスしたい！

みんなの健康があって、博物館活動がある

語り場
リラックス
つながる

「連続講座オンライン語り場」進行方法

各回の開催時間は13:00~14:30(90分)とし、基本的に最初の30分は講師からの話題提供、その後はブレイクアウトルームで4名程度のグループを作りディスカッション(20分)、各グループからの発表(20分)、最後に参加者のふりかえり、講師からのコメントを受け終了。

開催方法

Zoomウェビナー方式によるリアルタイム講座

第1回

さわる、歩く、なりきる～視覚障がい者も楽しめるプログラム

■ 講師

西島 亜木子(九州国立博物館企画課特別展室、主任研究員)



■ 講師から一言

2019年度から視覚障がい者向けの様々なプログラムを行ってきました。その中から、当事者に人気のレプリカ体験、バックヤードツアー、衣装体験をご紹介しますとともに、過去の失敗談についてもお話しします。

■ 開催日時

2024年9月20日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

38名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*今回の講座を受講して、視覚障がい者も楽しめるプログラムにするためには当事者の意見を徹底的に取り入れることや同伴者も楽しめるものにする、汎用性のあるプログラムにすることなどが大切であることを学びました。今後、私も視覚障がい者と美術鑑賞などの取り組みを行っていく際、今回の学びを活かして対応していきたいと思っています。

*九州国立博物館が様々な取り組みをされていることは知っていましたが、失敗談も含め、その裏側を知ることができてたいへん勉強になりました。ミュージアムと地域をつなぐためには、大変なことではありますが、ミュージアム側から積極的に動き、当事者の声を真摯に受け止め、反映させていくことが大切だと再確認できました。また、ディスカッションでは、美術館や県外の大学博物館など普段あまりお話する機会がない施設の方と交流ができて良い刺激になりました。

*西島さんのお話、視覚障がい者や同伴者が、博物館に対してどんなニーズを持っていたのかが良く分かりました。最終的には「誰もが楽しめる博物館」を目指す、とても大切なことと受け取りました。また館によって、色々な取り組みがあったり、なかったり、限られた人材や予算で考えていくことも難しく、今後の課題を学びました。しかし、

緒方先生がおっしゃるように「誰かが声をあげなければ始まらない」。ボランティア仲間にも伝えていきます。

*西島さんのお話で、同伴者にも楽しんでもらうことが、障がい者にも楽しんでもらうためには不可欠という点は、新たな気づきでした。同伴者というと、つい「支援者」とだけ捉えてしまいがちでしたが、等しく「来館者」のほずで、その人たちにも、より良い博物館体験を提供していきたいと強く感じました。すぐにプログラムなどにつなげることはなかなか難しいですが、普段の来館者対応などから見直していこうと思いました。

*本日の講座大変参考になりました。特に、西島様の最終目標として挙げられた、全ての人が楽しめる博物館を目指しているという点に非常に共感しました。予算をあまりかけられない当センターの現状において、障がいがあるにかかわらず、全ての人が学び楽しめる汎用性の高いプログラムを考える必要があると改めて気づかされました。

*今回の発表では、視覚障がい者向けプログラムの導入・きっかけから失敗談、現状までの流れを聞くことができ、とても分かりやすく、今後に活かせる内容でした。語り場では、特に「さわる」ことの大切さと、「さわる」ことでそれ以上の博物館とのつながりを生むには?といった話が印象的でした。初参加で、皆様のあふれるパワーに圧倒されてしまった部分もありますが、今後も受講を頑張っていきたいと思います。

*コロナ禍もあまりオンラインを経験していなかったので戸惑いも多かったのですが、無事に一回目に参加できました。改めて、研修の大切さを感じました。知らないことが多く、自館の遅れにも気づけました。

第2回

「Well-being」に資する天文解説

■ 講師

宮本 孝志(南阿蘇ルナ天文台、台長)



■ 講師から一言

人類は生まれてから数百万年、うれしい時、悲しい時にいつも星空を見上げて来ました。なぜ星空を見上げ、その下で暮らすことが人々のウェルビーイングにつながるのか、「天文台浴」の提唱と検証のお話です。

■ 開催日時

2024年9月27日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

34名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*南阿蘇ルナ天文台の宮本孝志さんのお話の中で、「である」「きづく」「ときはなたれる」「かえってくる」という印象的なフレーズがありましたが、特に「かえってくる」という言葉について考えさせられました。ワークショップなどを開催した時、「である」「きづく」「ときはなたれる」までは目的として良く吟味します。しかし、それを体験してから後に続く日常に、どんなかたちで影響していくのかという視点となる、「かえってくる」という言葉こそが大事なことだと思いました。

*今回の講座で、改めてWell-beingにつながる博物館活動とは何かを考えるのと同時に、Well-beingそのものについても理解しておかなければならないと感じました。また、今回事例発表のあったアンケートの分析手法についても、今後の活動につなげるために、学ばなければならない分野だと思いました。

*昨年度と同様でとても有意義な時間でした。夏に御嶽山のおんたけ休暇村(名古屋市の宿泊施設)に宿泊したのですが、そちらに「天文室」があり、宿泊者向けのサービスとして星空解説に参加させていただきました。プラネタリウムとは異なる、対話の空間もある環境で、自然と一体感も生まれ、科学的な好奇心と感動と癒しを同時にいただいた忘れられない思い出になりました。

今日のご発表を拝聴し、またブレイクアウトルームでのおしゃべりからも、天文施設が提供する博物館浴について、「博物館浴」という言葉が腑に落ちた感覚にあります。私の場合は特に体験したからこそその認知につながったように思います。博物館浴の視点をきっかけにして、博物館は利用者に多様な効果を展開できるなあ、とおもしろく思っています。

*テーマは「Well-beingに資する天文解説」で、主に地中から出てくる遺構遺物を対象とする考古博物館とは逆に天上を対象とする天文館の話ということで、大変興味深くお話を聞かせていただきました。そして夜間観測が主たる天文台では、確かに宿泊施設を兼ねた方がいいなと妙なところで感心しました。

アンケート調査の話では、段階が進むにつれ、回答の内容も単語から文脈へと理解も深化していくことが分かりましたが、ただ気になったのはアンケート回答者の年代が30代から40代ということで、参加者は親子連れに限られているのではないかとこの点です。語り場ルーム4でも、博物館や図書館を利用する・できる層というのはだいたい決まっていて、普段、博物館を利用しない層にどうやってアウトリーチすべきかが話題となりました。下関市でもまずは博物館の存在を認知してもらおうと、今年から市内博物館が共同で「教員のための博物館の日」を開催しましたが、なかなか先の長い問題です。

第3回

来館者に寄り添う、鑑賞の「処方箋」

■ 講師

前野 耕一（鹿児島市立美術館、美術館主幹兼学芸係長）

■ 講師から一言

美術館をもっと身近な場所と感じてもらう

ために、来館者の鑑賞にまつわる困りごと

への解決法を処方箋（作品を味わうための仕掛け）として提案した、小企画展「美術館を楽しもう鑑賞の処方箋」の取組みをお話します。

■ 開催日時

2024年10月4日（金）13:30～15:00（13:15～受付開始）

■ 受講者数

43名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*前野さんのお話では、ハウゼン氏による「感受性の段階」の振り返りから、来館者に寄り添う、趣向を凝らした展覧会企画の事例を伺い、作品鑑賞を通して市民の感受性を育てていく美術館の強い思いを感じました。また、それとは対照的に、美術館側の試行錯誤を感じさせない、広報物や展示解説の軽やかなアプローチもとても参考になりました。さらに、こうした企画や仕掛けは前野さんのキャリアとも深い結びつきが感じられ、年月をかけて学芸員が自分自身の思考や企画をブラッシュアップしていくことの重要性を感じました。ブレイクアウトルームでは、今回もゆっくりと皆さんのお話に耳を傾けながらホッとする時間を過ごすことができました。

*美術館と（自然史系）博物館で、「標本資料」の活かし方やイベントの内容など、色々異なることはあると思っていましたが、ブレイクアウトルームで一緒になった、諸橋近代美術館（福島県）の公園内のウォーキング×美術鑑賞はとても刺激的で、一個人として参加したい！と興味をくすぐられました。

また、対話型鑑賞法は手法として知っていましたが、「感受性の段階」については知らず、改めて論文からも振り返る機会をいただきました。私が所属する自然史系は、どちらかというと、客観的な科学的要素で観察する、などの方法がはじめの段階から取られているかもしれません。



ですが、主観的な感覚は興味を持つ第一歩のように大変大事で、美術鑑賞も参考に効果的なアプローチを問われている、と思いました。

美術館の関係者と話をする貴重な機会をいただけて、大変学びが多かったです。

*前野さんの企画された各小企画展は、どれも来館者に寄り添ったものであり、素敵な取り組みであると感じました。「悩みをやわらげる」「困っているときに学芸員が声をかけてくれるイメージ」などの目標がきちんと設定されているほか、ハウゼン氏の「感受性の段階」を参考にしないか模索するなど、鑑賞者について丁寧に考えながら、試行錯誤される姿が印象的でした。

当館は博物館ということもあり、「鑑賞」という視点で考えることは少なかったのですが、アートカードなど博物館でも取り入れられそうなことや、「語り場」では特に「対話型鑑賞」には学芸員のスキルが必要だということで、必読書を他館の方に教えていただけるなど、非常に勉強になりました。

*今回も有意義な時間を過ごせました。

グループ討議では美術館の方、考古学博物館の方、公民館の方となかなか一緒に話さない方とお話出来ました。公民館の方は、先日美術館のアウトリーチ活動の鑑賞会を公民館で行った事例を紹介されました。高齢者の参加者は鑑賞をきっかけに様々な語りをされていたそうです。高齢者の語りの引き出すきっかけが現実にはなかなかないのですが、素晴らしいお話が聞けたそうです。きっかけを作るための博物館活動は素晴らしいと思いました。

アートカードの話でも、販売している絵はがきを使ってすぐにでも、実行できるという話も出てかなり具体的なアイデアになりました。語り合うという重要性を認識し、博物館・美術館はしゃべっちゃいけないという常識を覆す必要があるという話も出ました。楽しかったです。ありがとうございました。

第4回

学芸員の学びから考える介護施設のレクリエーション

■ 講師

手嶋 翔一

（介護老人保健施設 松寿苑、介護士）

■ 講師から一言

博物館で実施されるワークショップと介護

施設で行うレクリエーションの類似点や

相違点に触れながら、認知症患者様への対応における留意事項やプログラムの提供方法についてお話します。

■ 開催日時

2024年10月11日（金）13:30～15:00（13:15～受付開始）

■ 受講者数

47名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*今回の講義を聞いて、「学芸員の資格をこのような活かし方があるのか」と、率直に感動しました。また、そのような活かし方をするために、（おそらく）戦略的にさまざまな経験を積まれてきた手嶋さんの来し方にも関心を抱きました。博物館の学芸員や自治体の専門職に限定されない、学芸員という職能の可能性を感じる回でした。

*今回の講座を受講して、認知機能や筋力維持だけでなく、気づきや表現が得られる機会を提供することや取り組みの工夫、博福連携によって認知症となっても、生涯学習ができる社会を構築していくことの大切さなどについて学ぶことができました。またグループディスカッションでは、「①回想法の効果について」「②世代間のつながりを作っていくためにはどうしたら良いか」など、対話によってさまざまな気づきを得ることができました。

*私が所属する館として、介護施設の方々とのつながりや交流はなく、今回介護の現場での博物館（学芸員）としてどのようなことができそうか、とても参考になるお話でした。これまで特別支援学校を含め「博学連携」のみでしたが、私が居住する広島県にも「手嶋さん」がいらっしゃると思いますので、まずはアンテナを張ることを忘れずに、人との交流を大切にしていきたいと思います。そして、支える側の負担軽減のためにも、館がどう関われるかを模索していきたいと思います。



*それぞれが身近にいるかもしれない「手嶋さん」を見つける事、そしてつながりを作っていくことが求められる。また活動を発信し、誰かの活動を受け取ることで場が広がっていき、アート活動が多くの人に届けられるようになるのだと思いました。

*手嶋さんの今回のお話は大変刺激的でした。今日は黙して学んだことを反芻する日になります。認知症を思い、かつ興味関心の振れ幅の大きい方々へ在宅復帰の手立てとなるようなワークショップとはどうあるべきか。とても大切に難しい問題を、手嶋さんのこれまでの経験と学びによって、きちんと整理され実践されている姿に感銘を受けました。「認知症でも生涯学習ができる社会へ」という標語は胸に刺さりました。博物館側の学びとして、興味関心が向かない人へのアプローチの仕方、前置きの声かけの重要性を改めて認識しました。興味関心を向けるきっかけとなる一言を意識した博物館でありたいと思いました。

*今日も、貴重なお時間をありがとうございました。

最後に、手嶋さんが孤軍奮闘されている状況というお話を伺いましたが、数年前の自分の状況と重ね合わせてしまい、胸が詰まる思いでした。しかし、自分も理解ある後輩に恵まれ、手嶋さんもこれから理解者ができ、色々な所とつながると確信しています。私たちも何かお役に立てることができると嬉しいです。

第5回

博物館と地域が手をつないだ「小さな子どものための」活動

■ 講師

秀瀬 みのり(高槻市立自然博物館(あくあびあ芥川)、主任学芸員)

■ 講師から一言

館の主催事業として乳幼児を対象としたイベントを、地域の子どもに関わる団体と連携して実施しています。「地域の子育て」に視点を置いた教育普及活動について、試行錯誤してきた経緯と現在地についてお話しします。

■ 開催日時

2024年10月18日(金) 13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

35名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*「保護者の居心地の良さを最優先にする」「ダメ!がない環境を作る」など、共感することが多く、勉強になりました。当日どのように参加者に伝えているのかを具体的に知ることができてよかったです。当館でも真似できるところはやっていこうと思います。

*本日のお話では、小さな子どものための活動を実現されるために、地域の方々とコラボしている点が非常に興味深かったです。博物館が仲間となり、地域で子どもを育てるという視点が大変勉強になりました。また、乳幼児や保護者への配慮がとても素晴らしく、乳幼児プログラムを実施する際に大切にされていることにもブレがないので、参加者は安心して参加できるだろうなと思いました。

*「幼児期の環境は、その後の成長に深く関係する」と言われています。自然と関わる「ハグロトンボ調べ隊」を作り、幼児から高齢者まで異世代間交流をしながらの体験は、とても良いと思いました。

以前、私は「はくとのみずくみ」絵本を幼稚園の年長組で、読み聞かせをして、★の形の工作をしました。しかし、時間が長くなり、疲れさせてしまったことがあります。今回のお話を聞いて、時間や工作の難易度など、事前打ち合わせが大事だと思いました。



*今日は地域連携をテーマとして、グループのメンバーも公民館や役場、博物館で教育普及を担当されている方々が一緒でしたので、互いに具体的な話から共有することができました。例えば、公民館では幅広い層(博物館に関心がない方も)が集まるということで、博物館としては羨ましいなあ、と思いますし、博物館には本物標本がある、として、公民館は羨ましいと思っている、というような相思相愛の思いなども共有できました。他施設のそうした現状を知る機会がそもそもなかったこともあって、地域の公民館や児童館にも意識的に目を向けていきたい、と思うきっかけとなりました。そのほか、地域連携こそ、その地元や施設ならではのユニークな取り組みが展開できる、というところでもとても魅力的な情報共有ができました。

*秀瀬さんのお話は、来館者に寄り添った温かいもので、きめ細やかな対応で、見習うべき点がたくさんありました。当館も、子どもや高齢者、障がい者などさまざまな人にとって居心地のよい美術館を目指していきたいと思っていますので、とても勉強になります。特に、当館のように小さな自治体の施設は、運営する人数も少ないので、たくさんイベントを打つ体力がありません。ボランティア、ではなく、協力団体という形は、博物館美術館との相性のよい考え方ですし、地域性に富み、博物館美術館が館外とのゆるやかなつながりを持つという意味でも、素晴らしい取り組みだと思います。

後半の語り場でも、また前回と異なる施設の学芸員さんたちとの交流で、共通の問題意識について話せて楽しかったです。

第6回

大学博物館は、学生の「保健室」

■ 講師

梅村 綾子(東海国立大学機構 名古屋大学博物館、特任助教)

■ 講師から一言

学校保健法で必置とされる保健室を、大学生は「心の支え」「学校の母」「逃げ場」と定義しました。しかし、大学にも一つの保健室があります。学生に寄り添い、チャレンジする大学博物館の取り組みをお話しします。

■ 開催日時

2024年10月25日(金) 13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

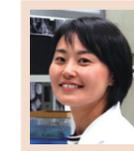
30名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*大学生が抱えている悩みや困難を紹介していただき、それに対して博物館ができることを考える、充実した時間となりました。特に印象的だったのは、不登校だった学生が学内のインターンシップ支援制度を利用して博物館の団体へ参加し、学校生活などにも好影響を与えた例です。“好影響”になるかどうかは学生によってさまざまかもしれませんが、博物館が困難を抱える学生とつながり、居場所を提供することができたという、私自身がぜひとも目指していきたい博物館の姿だと感じました。一方語り場では、来館者のメンタルヘルスに博物館が関わっていくことへのハードルや不安なども含め、多角的な意見を聞くことができました。博物館が「社会的処方」の場となるには、様々なハードルを乗り越えていかなければなりません。今回のような語り場、意見を交わすことができる仲間の存在が、現場にいる我々にとって心強い存在になっていると改めて感じました。

*梅村さんの発想(大学博物館は、学生の「保健室」)は、常日頃からの大学博物館として学生とどのように向き合い、博物館の存在意義を伝えるか自問自答されているからだなど受け止めました。また、その態度はこれまでの人とのふれあい方をバックボーンとするものなのだろうと思いました。自治体公設博物館に勤める者としても、今回のお話は博物館利用者との向き合い方を改めて見つめ直す



良い機会になったと思います。加えて、個別のことでとても感銘を受けたことがあります。名古屋大学博物館で博物館浴のPRを兼ねた独自の取り組みをされていること。これは自分の館でもできるし、やらなければと思われされました。梅村さんのものごとの捉え方や咀嚼の仕方に大いに刺激をいただくことができ感謝しています。

*出身大学には博物館がなく、加えて大学博物館を「保健室」として位置付ける、ユニークな取り組みのご紹介に新鮮さを覚えました。大学博物館に限らず、現代社会のなかで、博物館にそうした機能が求められていることから、これからの博物館づくりには欠かすことができない観点だと思いました。公立博物館では、来館者と1対1で関係を構築するのは難しいとしても、空間づくりなど、総体的なところでの工夫には取り組んでいけるのではないかと考えました。

*大学博物館という、地域の博物館とは少し違う要素を持った博物館で、大学生と共に様々なチャレンジされているお話は大変新鮮でした。人の弱音や不安に寄り添い協力できることを探る博物館という視点を持ったことがなかったですが、様々な年齢層が集う博物館は、誰かの居場所になる可能性もあるんだと新たな気づきとなりました。

*当館では博物館が第3の居場所となるのを目指し、ずっとその模索をしています。多世代が交流できる、ちょっと変な空間として面白いですね。今後多くの人が労働から解き放たれていくと、よりアイデンティティを求めて、博物館のような環境の居場所としての役割は重要になってくると思っています。

第1回

20年目の「子どものための美術館」をふりかえる

■ 講師

中込 潤(九州産業大学美術館 学芸室長)

■ 講師から一言

公募で集まった子ども達がスタッフとなり、約半年かけて展覧会を作る「子どものための美術館」(直方谷尾美術館)は今年で20年目。その歩みと、子ども達の成長について、立ち上げた学芸員が、元子どもスタッフとともに話します。

■ 開催日時

2024年11月8日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

29名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*中込さんと子どもスタッフ経験者の方、企画者側と参加者側の双方から、お話が何え大変興味深かったです。このような未来を担う子どもたちとのワークショップが20年間も続き、その結果として学芸員を目指す人や博物館に関わる方が育成されているという事実に、私も励まされました。

*直方谷尾美術館の子どもスタッフの取り組みは、企画展を拝見したこともあり、知っていたのですが、今回のお話でより深く知ることができました。今回のお話で、特に印象に残ったのは、美術館が自分の居場所になったというコメントでした。ミュージアム側として、参加者をあたたかく見守ることは意外と難しいことですが、改めて意識してみようと思いました。

*子どもスタッフとして美術館にかかわった方々が成長し学芸員を志すというお話、率直に感動を覚えました。しかも、美術館と大学が地理的に近いエリアのなかで流れがあるように見え、よい循環ができあがりつつあるのかなと思いました。また、子どもたちを特定の評価軸だけで評価しないというのは、社会教育施設にとってとても大切な考え方だと思っており、それを「子どもたちを見守る」という方法で実践されている点も勉強になりました。



*20年も続いている、子どもスタッフの活動は感動です。イベントを立ち上げても、なかなか続かない事は経験して十分分かっています。そんな中、20年継続してきたというのは凄い一言です。

また、子どもたちの「楽しいからあなたも参加したら」という口コミで広がるというのも素晴らしいです。

数年前に見た「まねっこ展」は、質の高さとユニークな試みに、とても驚いたとともに感動したことを思い出しました。やっぱり20年の教育効果は凄いです。今後も続けてほしいです。

*直方谷尾美術館の「子どもスタッフ」の20年の活動のお話をお伺いして、改めてユニークで素敵な活動だと思いました。現在のスタッフや元子どもスタッフ、大人スタッフ、元館長へのインタビューなども面白く聴かせていただきましたが、それに加え、長く続いている理由として、

● ミッションと合致している

● 良い活動(参加者にとっても実施者にとっても意味がある!)である

ということが挙げられていたのも、すごく印象的でした。当たり前のことのはずなのですが、なかなかそうならないのが多くのミュージアムの現状なのかもしれないと思います。ミッションや活動の意義、そして課題までもが、中込さんから市川さんという次の世代に共有できていて、引き継がれているところは本当に素晴らしいと思います。個人的にも、もっとたくさんミュージアム関係者にしてほしい活動の一つです。

*直方谷尾美術館の20年の取り組みを聞いて子ども時代に、スタッフとして参加した本人が、学芸員取得のために、九州産業大学に入り勉強中との話。やはり子どもの時、実物を見たり、商店街に出て絵をかいたり、上学年の子や友達に「たのしいよ」と聞いたりしたことが、将来への夢につながったのだと思います。直方谷尾美術館は、建物も展示もいいですね。暖かさが感じられます。大人も行きたい美術館です。

第2回

鑑賞教育×平和教育プラットフォームの製作と活用

■ 講師

堀越 萌李子

(長崎県美術館、エドゥケーター)

■ 講師から一言

長崎県美術館は、鑑賞教育と平和教育の関連性に着目したプロジェクトに取り組んでいます。あらゆる教育現場で、子どもたちと作品との多様な出会いをサポートするデジタルコンテンツについて話します。

■ 開催日時

2024年11月15日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

30名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*平和教育という教員としても身構えてしまうことがありますが、モノを通じてそれぞれの考えを語り合い、それが他者から認められるというこのプログラムは、教員や生徒が感じる平和教育への敷居の高さを解消してくれるものかもしれないと感じました。

*堀越さんの取り組みの話、興味深かったです。

とにかく、コツコツやりながら横のつながりを作って、つながった皆さまが、それぞれの立場で鑑賞教育×平和教育のプラットフォーム作りができると良いですね。そのプラットフォームというのは、各家庭であったり、地域自治体や行政、または企業であったりしてほしいと感じました。でも、それを実現させるには、やはりコツコツしかないですね。本日の話を聞いて、ますます自分の仕事を頑張ろう!と思えました。

*長崎県美術館のスタッフに教員がいることを活用した学校との連携、そして志を持ったスタッフ・先生のコラボの継続性に感銘を受けました。私の所属する「大学博物館」は、地域に根差したものでないことも多く、地域の先生とつながることの難しさもありますが、市内の館園を介して、直接でなくても間接的につながりを持ち、学校連携を進められる基盤を作っていきたいと強く思いました。



*長崎県美術館の活動は、これまでの先生との連携の積み重ねの上に成り立っていることを確認しました。また、学校の方に動機があって、美術館はそのサポートという形をとっているところがうまくいっているところではないかとも思います。ますます発展してほしい活動ですね。

*PEACEの取り組み、大変興味深く拝聴しました。一般公開だけでなく、指導者用のコンテンツも充実しており、素晴らしいと思います。美術作品を通して平和教育を行うあり方は、これまでの語り場でも紹介されてきた、博物館・美術館(資料)を通して社会課題を考える視点に通じ、より幅広い層にメッセージを届けることができる方法の1つではないかと感じました。

*博物館や美術館に、学校の先生が配属されるというお話はよく聞きますが、先生と学芸員が協力してひとつのプラットフォームを作り上げた事例は初めて聞いたので、とても興味深かったです。学校側のニーズを聞き、積極的につながる機会を持つ姿勢が重要だということを改めて考えさせられました。

*对学校教育の取り組みを、所蔵作品を使用して一つのプログラムとして確立しているところがとてもすごい事だと感じました。学校から都度、対応を依頼されて実施する、ということはよくあることかと思いますが、美術館として何を提示し、何をどのように感じてもらうかを、参加している生徒さんに示し、実施することはとても難しいことかと思います。そこを先生たちとも連携をし、きちんとプログラムとして明確にされており、とてつもない努力と苦勞をされたのだろうということが伝わってきました。さらに、より多くの学校の先生にプログラムを利用していただけのように、ティーチャーズデーを設けて積極的に美術館からアピールをしていること、プログラムを多くの方に利用していただけるようなプラットフォームという場を作成されていることも、大変に素晴らしいと感じました。

第3回

不登校児童生徒を支える博物館活動

■ 講師

池田 優(北九州市立自然史歴史博物館、教育普及担当係長(ミュージアムティーチャー))、中西 希(北九州市立自然史歴史博物館、学芸員)



■ 講師から一言

オンラインによる授業で博物館が果たす役割や、事業に関わる担当者の熱い思いをお伝えします。また、子どもたちの感想をもとに、学習への興味・関心の高まりや、外界への意識の変化についてもお話しします。



■ 開催日時

2024年11月22日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

37名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*不登校児童生徒に向けた博物館プログラムの実例を知ることができる、貴重な機会でした。

講座を通して、このような取り組みを行う館がまだ少ない一方で、博物館が不登校児童生徒の支援になる可能性を見出すことができました。一方で、私自身もこのような取り組みをつくっていきたくて考えていますが、不登校児童生徒へ向けた活動となると、私自身も学芸員のフィールドを延長して、さまざまなことを学ばないといけないと思いました。「オンライン語り場」ではいつも、博物館の可能性とともに、そこにある壁や葛藤を皆さんと共有することができ、大変充実した場となっています。

*不登校児童生徒へのオンライン授業は、外部とつながりにくい子どもたちにとって、学びの興味を持つきっかけとなっていることが分かりました。

当館は不登校児童生徒に向けたプログラムはありませんが、総合学習等で学校へ出張授業をした時など、先生から「博物館の授業を受けるために午前中だけ登校できた生徒がいて…」ということを知ったり、不登校まではいきませんが、休みがちな生徒が昆虫を拾ってきたので、一緒に標本を作りたいから方法を教えてほしいと、先生から問い合わせを受けたりしたことがあります。

幼い頃リピーター来館者だった子が、小学校でカエルの死体を見つけて標本になるからと大切に手に持っている、先生に「そんなことしちゃダメ」と叱られ不登校になった子がいました。保護者からその話を聞き、博物館でカエルの骨格標本を作ろうと提案し、当時小学2年生のその子は、学芸員とともに標本を作り上げました。その後、不登校がどれくらい続いたかは聞いていませんが、今年で彼は大学4年生になり、博物館実習で再会しました。

不登校の子どもはそれぞれ理由も違い、個別に対応することになるので博物館の現場がどこまで動くのか、動けばよいのかと悩んでいます。

当館としては、不登校を支援する団体や学校内での支援対応の先生とつながり、話を聞くことはできるかなと、支援者を支援できる方法を考えていきたいと今回の講座を聞いて思いました。

支援者には、博物館はだれでも受け入れる場所であり、居場所にしても良いのだということを一先懸命丁寧に伝えていくことだけでも有効なのだ、改めて再確認できました。

*学校教育とはまた違う教育の場を提供したいという思いをもち、日々の業務に当たっていますが、なかなか不登校児童生徒へのアプローチまでは至っていません。

今回のご発表では、実際の授業の具体的な方法などを知ることができ、とても参考になりました。

本市では学びの多様化推進室という組織が今年度立ち上がり、不登校児童生徒への支援など、さまざまな役割を担っています。同じ教育委員会内にいるので、何かプログラムなどを提供していくことができないか、北九州市の事例をもとにしながらアプローチしていきたいと思いました。

*お話を聞いて、オンライン授業を企画した、北九州市の教育委員会の方にもお話を伺いたいと思いました。教育委員会が生徒と博物館を仲介するだけでなく、配信の手配やサポートをして、学芸員が授業の内容づくりに集中する体制づくりが素晴らしいと思いました。

第4回

夢二を伝える「こども学芸員」活動

■ 講師

小嶋 ひろみ
(夢二郷土美術館、館長代理・学芸員)



■ 講師から一言

夢二郷土美術館では2011年から「こども夢二新聞」の募集を開始、翌2012年から「こども学芸員」活動を継続しており、故郷を同じくする子どもたちが竹久夢二を発信しています。その活動内容などをお話いたします。

■ 開催日時

2024年11月29日(金)13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

20名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*今回の発表で一番印象が強かったのは、やはり10年間も「こども学芸員」の活動が継続しているということでした。ワークショップやイベントは単発で終わることも多いかと思いますが、10年も続いているということで美術館側のスタッフのご苦労が想像されます。また、小嶋さんがご発表されていたとおり、単発ではなく10年間も継続しているのが美術館と地域とがつながる仕組みにもなっているのだと感じました。前回のいのちのたび博物館の池田さんと中西さんの発表の際にも思いましたが、一つの活動を、ブラッシュアップしていきながら継続していくことの大切さを改めて感じました。

また、こども学芸員の前段階として参加することになる「こども夢二新聞」においても、新聞社とつながりを持つという仕組みになっていることが印象に残りました。感想でもおっしゃられた方がいらっしゃいましたが、学芸員だけでなく新聞記者という他の視点が入り、より本格的になっていることがとても上手い仕組みだと思いました。新聞がより本格的になり、子どもにとっても充実感が増すだけでなく、何かの「プロ」と関わる機会は少ないと思いますので、とても新鮮な体験になっていると思います。

*今回の講座の後、YouTubeで配信されているこども学芸員の解説を大変面白く拝見しました。みなさんが

自分の言葉で解説をされていて、作品についてきちんと調べていることが伝わり、解説を聞き終わった後、自分でもその作品についてもっと知りたい、ちょっと調べてみようかな、と思わされる解説でした。展示、図録、ギャラリートーク、配信と色々な形態で活動のアウトプットをしていることもとてもすごいと感じました。

*こども学芸員をする子ども達の成長を見ることで、学芸員さんたちの励みになっていることが分かりました。私は、現在大学美術館の学生ボランティアとして、毎月1回小学生を対象としたアート教室を担当しています。私も子どもの笑顔が励みになっています。

今日のお話でエネルギーをいただきました。今後も活動を継続していきたいです。

*「こども夢二新聞」「こども学芸員」といった年間通しての活動を、10年単位で継続されていること自体に感銘を受けました。子ども達や地域の未来を支えられる場としての博物館であるために、大学という冠はつきませんが、当館でも地域向けの活動を進めていきたいと思えます。

*こども学芸員活動やこども夢二新聞づくりが10年以上も継続されているということに、美術館と地域とのつながりの深さを感じました。そして、子ども達から力を貰っているのを知り、こちらも嬉しくなりました。

子ども達を募集する時、また活動時間、事後の振り返りなど、保護者も含め、多くの配慮が必要だと思います。活動時間は90分というのも、基準ですね。アンバサダーとなった子どもが後輩を指導しているのも、魅力的です。そして、新聞づくりもすごいと思いました。地元新聞社の記者が来て、本格的な壁新聞が出来ました。自分の選んだ作品の前での、ギャラリートークは是非、YouTubeで見たいです。

第5回

小学生からシニアまで！骨格標本作製サークル「なにわホネホネ団」の21年

■ 講師

西澤 真樹子(認定NPO法人大阪自然史センター / 理事・教育普及事業担当、なにわホネホネ団団長)



■ 講師から一言

自然史博物館を拠点に活動する「なにわホネホネ団」。年齢も職業も異なる団員が、哺乳類の骨格や毛皮、鳥類剥製を21年間作り続けています。前代未聞の標本サークルが、博物館でどんな化学反応を起こしたかをお話します。

■ 開催日時

2024年12月6日(金) 13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

29名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*今回、長い期間多種多様な参加者をどのようにまとめてこれたのか、とても興味を持って拝聴していました。西澤さんが言われた「場所はなくても、集められる時にとにかく集めて置けるところに置く」という潔さや、「大事にするのは資料、人の方を大事にしているとぶれる」と厳しさをみせつつも、「ノルマや負担は課さずに、おやつを用意して居心地の良い場所にする」という思いやりに溢れているところが、信念があって魅力的でかっこいいと感じました。簡単にマネできることではありませんが、継続していくための心の有り方を学べた気がします。

*大阪府「なにわホネホネ団」の21年について団長・西澤真樹子さんのお話を聞き、生きの良さを感じました。また、「不登校の子どもを学校に行かせることが目的ではない。その子が納得できることを見つけることである。」というお話も明快でした。ご自身の経験から出てきた言葉だと思いました。市民が夢中になれる場をつくりだすことが美術館、博物館に求められていることだと思います。それには、21年という年月も必要だったわけです。

*なにわホネホネ団の活動は知っていましたが、実際にどのようにして運営されているのかを詳しく聞かせていただき、

とてもよい機会になりました。世話役(=リンクワーカー)の存在が可視化、言語化されており、さまざまな活動に応用できるのではないかと思います。

*今回のような、市民が主体となったサークルがあることを初めて知ったので、たいへん勉強になりました。博物館の資料収集の力となりつつも、参加する市民にとっては自分らしくいられる場所になっているところがいいなと思いました。また、ディスカッションでは、大学生や美術館の方の実態なども聞いて視野が広がった気がします。歴史分野では、どのようなところに活かせるか、今後考えていきたいと思っています。

*今回の西澤さんが、危惧されることは自分が飽きる事とお話されていましたが、とても大切な考えだと思いました。自分が楽しくないものを、皆さんに勧めても参加したいという気持ちにはならないでしょうし、魅力的に感じないと思いました。

また、「大きなことを語るの好きではない」と話されていたことに、ハッとさせられました。仕事をしていると、どうしても目的・効果や事業に対する評価などが付いてまわり、予算獲得のためにも大きな目標を立てがちです。まず身の回りにある小さな事柄を一つずつ大切にしていきたいと思っています。

*西澤さんの「博物館に共感してもらう人を増やすことが目標」「博物館を社会資源にしたい」という言葉が印象に残りました。信念を持って活動をされているから、20年以上も継続しているんだと実感しました。

第6回

恐れず弟子をとれ！～博物館の最コアユーザーの育成～

■ 講師

刀禰 浩一(沖縄市立郷土博物館、主任学芸員)

■ 講師から一言

専門的に学びたい子どもたちを、博物館はどうやってサポートすべきでしょうか?地域の博物館が昆虫少年をあつめ、未来の学芸員候補へと育てる過程をお話します。

■ 開催日時

2024年12月13日(金) 13:30~15:00(13:15~受付開始)

■ 受講者数

28名

■ 事後アンケート

本日の感想をお書きください。

*近隣の大規模館とうまく連携していくことなど、中小規模館が事業を展開していく上で必要な技術的な部分から、科学や科学的な思考を社会に普及していくための博物館の役割、そのインターフェイスとしての沖縄市立郷土博物館の話まで、いくつもの重要な論点をご自身の経験をもとに報告され、大変勉強になりました。まずは自分が楽しみ、その姿を人に見せていくことの大切さは、これまでのオンライン語り場を通して学んだことの1つですが、今回の刀禰さんのご報告でも改めてその重要性を認識することができました。

*刀禰さんのお話、とても考えさせられました。沖縄での、子どもの教育環境がとても厳しい課題があるという話から、「体験格差」の言葉が浮かびました。経済的なゆとりが無いと、子どもに習い事や旅行などの体験をさせることが出来ないというのは、世の中がある程度豊かになったからこそ生まれた事態だとは思いますが、やはり切ないです。公的施設である博物館・美術館は、家庭での経済状況に関わらず、館に来る子どもたちに「体験」を提供できる場所です。その機能を最大に生かすことで、「経済的な格差≠体験格差」を掲げていくことが出来るだろうし、そうならなければならないと思いました。博物館・美術館には、お金をかけた習い事や旅行などにも匹敵するような体験を、来館者に提供できるポテンシャルがあると信じています。

*刀禰さんの経歴とそこから現在に至るまで続く活動は、たいへん興味深いお話でした。何より、自分自身が楽しむことで、仲間が増えていくというのを体現されていると感じました。

*美術館職員として利用者にどんな場を提供するか、ということはまず考えるべきことだと思いますが、そうして場を開いた先での自分(職員)への影響までは考えて来なかったなあと、内省のきっかけをいただきました。ミュージアムによって生まれるウェルビーイングの対象に、自分も入ってくるのだと、直接的には業務に関係ないかもしれませんが、自分が美術館で働く意味を少し考えてみたくなりました。

*沖縄市立郷土博物館の活動は、対象や関わる「コアユーザー」の属性が違うだけで、当館の学生達とのかかわりや取り組みに通じるものが多く、人員の非常に少ない中での「協働者」の獲得への道しるべをいただいたような気がしました。当館学生スタッフたちとも、こういった情報を共有し、活かしていきたいと思っています。

*沖縄市の街の現状を話していただいたので、子どもたちの経済的な背景情報を踏まえつつ、博物館の現状や活動を理解でき、参考になりました。また、話を聞きながら、SNSが普及して興味のある情報だけに目がいきがちなかの中で、博物館がどうあるべきか、考えさせられました。

「未来の学芸員」育成プログラム開発講座チラシ

7

「未来の学芸員」育成プログラム開発講座
オンライン語り場

「地域の子ども、若者を支えるミュージアム活動」

数ヶ国では、小・中学生の不登校が約30万人（2023年度調査、文部科学省）を越え、15歳から20歳までの若者のひきこもりは約60万人（2023年度調査、内閣府）という深刻な状況にあることから、若い世代のメンタルヘルス・ウェルビーイング対策は喫緊の課題です。

こうした事態の改善に向け、地域の社会資源の一つである博物館は、コレクションを活用して、どのように適切な社会課題に向き合うことができるのでしょうか？

カナダの医師会は2018年11月から、患者の健康回復を促進する治療の一環として、博物館への訪問を「処方箋」に書く取り組みを始めました。医師会と博物館が連携し、心身にさまざまな健康問題を抱える患者とその家族などが、無料で博物館に入室し、芸術文化の健康効果を享受できるようにしました。

地域にあるミュージアムに、できることはないのか？

そこで、本事業では、カナダをはじめ、米国、英国、台湾などの事例調査をもとに、地域住民に向けた、そして児童生徒や若者コミュニティをターゲットとした「博物館×プログラム開発」をテーマとして、社会資源の新たな活用方法＝社会的処方箋となる「博物館処方箋」活用方法を提案したいと考えています。

今回の連携講座は、「オンライン語り場」となっています。

毎週金曜日の午後からの90分、地域のミュージアムを活用しながら、粘り強く実践活動を進める、学芸員、教員、リンクワーカーなどからの課題提供を受け、その後は参加者と一緒に意見交換を行う「語り場」とします。こうした「語り場」を通じて、地域の学校、社会教育施設、社会教育団体などが協働した新たな地域人材育成の方向やプログラム開発を考える機会を共に作りましょう。

※博物館・博物館学を通して、博物館の持つ心身健康に与える効果・影響について学びます

期数	開催日	開催時間	タイトル	講師
1	11月8日(金)		20年目の「子どもたちのための美術館」をふりかえる	中込 真 (九州産業大学)
2	11月15日(金)		鑑賞教育×平和教育プラットフォームの制作と活用	高橋 穂香子 (福岡県立美術館)
3	11月22日(金)	13:30~15:00 (受付13:15~)	不登校児童生徒を支える博物館活動	高橋 穂香子 (福岡県立美術館)
4	11月29日(金)	13:30~15:00 (受付13:15~)	夢を伝える「こども学芸員」活動	小嶋 ひろみ (九州産業大学)
5	12月6日(金)	13:30~15:00 (受付13:15~)	小学生からシニアまで！専任職とボランティア「ななわね美術館」の21年	高橋 穂香子 (福岡県立美術館)
6	12月13日(金)	13:30~15:00 (受付13:15~)	忘れず誇りをとれ！博物館の「コアユーザー」育成	刀横 一 (九州産業大学)

開催方法 Zoomによるライブ配信(双方向型) オンライン 定員 30名 受講料 無料

参加対象 博物館、図書館、公民館、公民館、福祉センター、大学教員、学芸員、児童館職員、リンクワーカー「J」プログラム開発に協力する方、博物館学を学ぶ学生等

チラシ表面

「未来の学芸員」育成プログラム開発講座
オンライン語り場

【参加にあたっての注意事項】

- 参加にあたっては、事前にインターネット上でアカウント登録、スマートフォンでの参加が必要です。
- 参加費は無料ですが、Zoomのインストールやアカウント作成に必要となるインターネット接続料はご自身の責任でください。
- 参加費は無料ですが、Zoomのインストールやアカウント作成に必要となるインターネット接続料はご自身の責任でください。

申込方法 希望者は、① 氏名、連絡先(住所、電話番号)、② 所属(学校、会社、団体)、③ 所属(学校、会社、団体)、④ 希望する期数(1~6)を明記し、E-mail: museum03@ip.kyusyu.ac.jp へ、お申し込みください。なお、申込締切日は12月10日(金)となります。また、希望する期数に空きがない場合は、ご了承ください。

参加対象 博物館、図書館、公民館、福祉センター、大学教員、学芸員、児童館職員、リンクワーカー「J」プログラム開発に協力する方、博物館学を学ぶ学生等

開催方法 Zoomによるライブ配信(双方向型) オンライン 定員 30名 受講料 無料

参加対象 博物館、図書館、公民館、福祉センター、大学教員、学芸員、児童館職員、リンクワーカー「J」プログラム開発に協力する方、博物館学を学ぶ学生等

主催 九州産業大学 九州産業大学地域創生研究センター

チラシ裏面

8 博物館のリラックス効果に関する「博物館浴」実証実験

【プログラムの背景・目的】

「博物館に行くと、広くて落ち着く」「絵を見ると、うっとりする」などの声を聞くことがある。しかし、これは個人による主観的な感想で、科学的な根拠はない。

今回は、オンライン語り場を受講した、全国の博物館・美術館等の協力を得て、各地の児童生徒、若者、学校関係者、

フリースクール関係者(各回20名)を対象に、作品鑑賞前後の生理・心理測定と学芸員の仕事体験をもとに、受講生が博物館のリラックス効果の科学的分析法と未来の博物館像を考える機会とする。

【講義】

「博物館の歴史」、「学芸員の仕事」、「国内外の博物館浴研究動向」、「実験を行うための様々な生理測定機材、心理測定用紙」について、講義・説明する。

【実験・演習(測定機材を直接触って観察し、実験の臨場感を体感できるようにする)】

今回は、釧路市立美術館(北海道)、国立西洋美術館(東京都)などで開催した。具体的には、以下のような内容である。

実験①(作品鑑賞前の自分のストレス度を生理的・心理的に測定してみよう)

演習①(展示室で作品鑑賞しよう)

実験②(作品鑑賞後の自分のストレス度を生理的・心理的に測定してみよう)

演習②(学芸員になんでも聞いてみよう)

1 第1回「博物館浴」実証実験

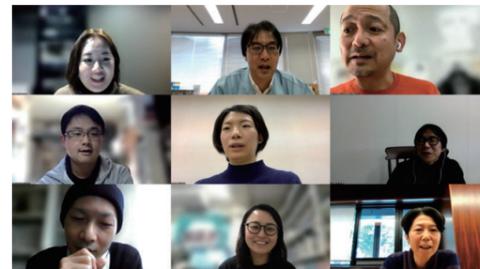
- 開催日時 2024年6月10日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 釧路市立美術館 (北海道釧路市幣舞4-28)

- 実施方法 心理測定(POMS)、生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 参加者 23名

2 第2回「博物館浴」実証実験

- 開催日時 2024年6月24日(月) 10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 国立西洋美術館 (東京都台東区上野公園7-7)

- 実施方法 心理測定(POMS)、生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 参加者 41名



3 第3回「博物館浴」実証実験

- 開催日時 2024年7月8日(月)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 開催場所 国立西洋美術館
(東京都台東区上野公園7-7)
- 参加者 25名

4 第4回「博物館浴」実証実験

- 開催日時 2024年9月9日(月)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 開催場所 釧路市立美術館
(北海道釧路市幣舞4-28)
- 参加者 20名

5 第5回「博物館浴」実証実験

- 開催日時 2025年1月20日(月)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 開催場所 釧路市立美術館
(北海道釧路市幣舞4-28)
- 参加者 20名



実証実験(第3回:国立西洋美術館)



実証実験(第5回:釧路市立美術館)

博物館健康ステーション/ミュージアム・カフェ事業

【目的】

九州産業大学教員と講座修了生が地域住民を対象とした博物館健康ステーション/ミュージアムカフェを企画立案・実施運営し、各地域の博物館・美術館等を見学し、博物館資料を活用した新たな博物館浴プログラムを開発する機会とする。なお、「博物館健康ステーション/ミュージアムカフェ事業」

開催に当たっては、地域住民を20名募集し、九州産業大学教員からの講話などを基に、地域住民の交流の場=つながりの場を設ける。合わせて、作品鑑賞前後の心理・血圧測定からリラックス効果を定量的に測定すると共に、ミュージアムカフェの効果を科学的に評価する方法を実証する機会とする。

1 第1回ミュージアムカフェ

- 開催日時 2024年8月2日(金)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 博物館浴プログラム体験、心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 開催場所 下関市立考古博物館
(山口県下関市大字綾羅木字岡454)
- 参加者 17名

2 第2回ミュージアムカフェ

- 開催日時 2024年9月8日(日)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 博物館浴プログラム体験、講義
- 開催場所 北海道立釧路芸術館
(北海道釧路市幸町4-1-5)
- 参加者 23名

3 第3回ミュージアムカフェ

- 開催日時 2024年10月5日(土)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 実施方法 博物館浴プログラム体験、心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 開催場所 福岡市博物館
(福岡県福岡市早良区百道浜3-1-1)
- 参加者 12名

4 第4回ミュージアムカフェ

- 開催日時 2024年10月20日(日)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 北海道開拓の村
(北海道札幌市厚別区厚別町小野幌50-1)
- 実施方法 博物館浴プログラム体験、心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 参加者 23名

5 第5回ミュージアムカフェ

- 開催日時 2025年1月11日(土)
10:00~17:00(9:30~受付開始)
- 開催場所 九州国立博物館
(福岡県福岡市石坂4-7-2)
- 実施方法 博物館浴プログラム体験、心理測定(POMS)、
生理測定(血圧、脈拍)、講義
- 参加者 17名



ミュージアムカフェ(第1回:下関市立考古博物館)

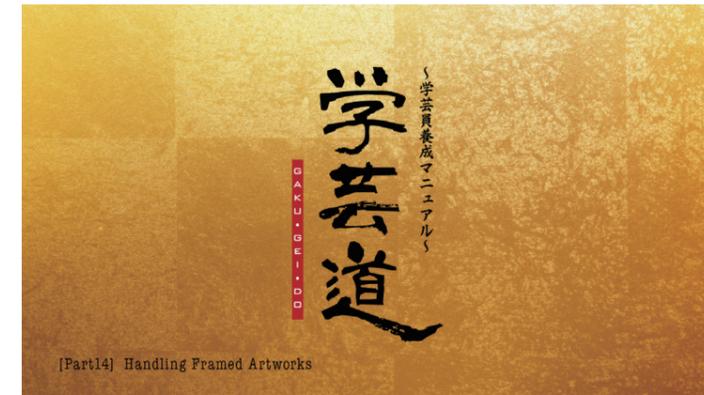


ミュージアムカフェ(第4回:北海道開拓の村)

10 多言語学習教材開発事業

博物館が有する「守る技術(保存・修復)」「調べる技術(調査研究)」「見せる技術(展示)」「伝える技術(教育普及)」「以下、4つの技術」を学ぶために、これまで「仏像」「茶器」「掛軸」「着物」「刀剣」「甲冑」などの取り扱いを紹介する博物館学習映像教材「学芸道」を制作し、シリーズ化してきた(27項目)。これらは、現職学芸員、学芸員を目指す学生、そして「博物館が大好きな」高齢者の学習教材となっている。今回、これらのうちから、「額装作品の取り扱い方」

「画面保護ガラスの取り扱い」英語版の計2本として多言語化することで、「いつでも、どこでも」受講可能なオンライン学習映像教材が、海外博物館、美術館などへ広く紹介できるようにした(今回の作成で、28項目40本となった)。また、外国人住民、訪日外国人にとっても、博物館の4つの技術を知る、日本文化を知る、そして博物館のバックヤードを知る教材となることが期待できる。



学芸道(多言語版)額装作品の取り扱い



学芸道(多言語版)収録風景

11

英国博物館関係者を招聘した国際シンポジウム事業

シンポジウムチラシの表と裏



チラシ表面



チラシ裏面

2025九州産業大学国際シンポジウム「美術館が変わる、若者を変える」

【開催趣旨】

我が国は、「不登校児童生徒29万9千人(文部科学省調査)」、「若者のひきこもり65万3千人(15歳~39歳、内閣府調査)」そして「強い不安、悩み、ストレスを感じる労働者82.2%(厚生労働省調査)」と極めて深刻な状態となっています。カナダ、ベルギーなどの医療保険制度では、医療従事者(主に医師)が地域のリンクワーカーを介して、患者へ適した博物館が行う教育プログラムへの参加を薬と同じように「処方」しています。また、英国のNHS=国民保健サービスはロンドン大学と共同し、文化芸術を活用したメンタルヘルスプログラムを地域住民へ提供しています。我が国においても、「子ども・若者」を含めた地域住民の「メンタルヘルス支援」に向けた博物館プログラム開発、そして医療・福祉従事者と地域住民、博物館などをつなぐリンクワーカー人材育成を目指すことが、「不登校・若者のひきこもり課題」解決に向けた社会資源の新たな活用方策=社会的処方^{*}の場となる「博物館健康ステーション」の構築、さらに「博物館浴」による「子ども・若者」を支える地域医療の新たな枠組みを提案する機会になると考えます。

しかし、我が国ではこうした実践事例がなかなかありません。そのため、海外事例を知る必要があります。私たちは、これまで文化庁事業の採択を受け国際シンポジウムを開催し、その成果を広く日本の博物館関係者と共有しながら、博物館の社会的価値を考えてきました。今回は「美術館が変わる、若者を変える」をテーマに、英国の実践事例を学ぶ国際シンポジウムを開催します。英国のダリッチ・ピクチャー・ギャラリーでは、地域の多様な人々とともに美術館の未来を創るために、地域の若者たちをリサーチャー(調査員)として採用し、2年間にわたって「過去は現在のために(The Past for the Present)」というリサーチ活動を行ってまいりました。若者のメンタルヘルスの支援は、この活動の大きな支柱の一つです。その実践報告を受け、「子ども・若者」を支える博物館と医療・福祉従事者による「博物館浴」の可能性について、日本の参加者と一緒に考えていきたいです。

*博物館浴:博物館見学を通して、博物館の持つ癒し効果を人々の健康増進・疾病予防に活用する活動

■開催日時

2025年1月25日(土) 19:00~21:30(オンライン開催)
*英国現地時間/10:00~12:30

■オンライン調整会場

九州産業大学総合情報基盤センター
(福岡市東区松香台2-3-1 中央会館3階)

■開催方法

① ZOOMによるオンラインにて、日本、英国を同時中継して行う。② (株)サイマル・インターナショナルによる同時通訳で行う。同時通訳アプリ「interprefy」の使用。

■参加者数

105名

【開催内容・スケジュール】

「美術館が変わる、若者を変える」

■登壇者

●ジェーン・フィンドレー (Jane Findley)
英国:ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / Head of Programme & Engagement

●タラ・オケケ (Tara Okeke) 体調不良のため欠席
英国:ダリッチ・ピクチャー・ギャラリー / Community Researcher

■司会進行

緒方 泉 (Izumi Ogata) / 九州産業大学地域共創学部特任教授

■開催の挨拶 (日本時間 19:00)

大日方 欣一 (Obinata Kinichi) / 九州産業大学美術館長
ジェーン・フィンドレー (19:05~19:45 40分(発表))

「過去は現在のために(The Past for the Present)」—ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの歴史的絵画は現代人にいかに語りかけるか

■休憩 (19:45~19:55)

■質問を基にしたディスカッション (19:55~21:05)

ディスカッションは前半を「過去は現在のために(The Past for the Present)」プロジェクトへの質疑応答とした。後半は、英国の博物館改革に向けた活動を行う若者グループ「Kids in Museums」の活動報告を映像で紹介した。その後の質疑応答には、メンバーのアリソン、カリスも加わった。

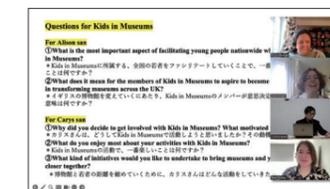
■英国の3名の登壇者から、まとめのメッセージ (21:05~21:20)

■閉会の挨拶 (21:20~21:25)

大日方 欣一 (Obinata Kinichi) / 九州産業大学美術館長



ジェーンさん発表



討論風景
ジェーンさん、アリソンさん、カリスさん



オンライン調整会場全景

【発表趣旨】「過去は現在のために(The Past for the Present)」— ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの歴史的絵画は 現代人にいかに語りかけるか

ジェーン・フィンドレー（英国）

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーは、コミュニティ主導の参加型アクションリサーチ、「Participatory Action Research(以下PARとする)」という手法を導入し、コレクション展示、調査、プログラム企画に対する新しいアプローチを提供してきました。

本稿では、その実践事例について考察します。当館は、「The Past for the Present(過去は現在のために)」というプロジェクトに向けて、社会調査支援組織のShortworkと協力して、地域住民からリサーチャー(調査員)9名を起用し、PARの手法を学んでもらいました。こうして結成されたコミュニティ・リサーチャー・チームは、共同作業で活動フレームワークを構築し、「ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーをさらに現代社会にふさわしい意義のある美術館にするにはどうすればよいか」という調査の中心テーマを探求しました。当館が「The Past for the Present(過去は現在のために)」プロジェクトとその成果を通して目指すのは、200年以上の歴史がある美術館が、どうすればさまざまな近隣コミュニティにとっての存在意義を保てるのか、また当館の空間を活用したプログラムを企画するにあたり、どのようにして新しい意見や視点を取り入れるのかといった答えを見つけることです。

本稿の前半では、本プロジェクトの背景事情に触れ、PARの概要を説明し、この手法を採用した理由を挙げ、本プロジェクトではPARをどう活用したのかをまとめます。後半では、PARの結果をどう実践に結び付けたか、その後もPARの知見が継続的に当館のプログラムや活動に反映されていることについて取り上げます。

背景

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーは、一般公開のために美術コレクションを収蔵・展示する目的で建設された世界初の美術館です。創立200年を超える、ロンドン南東部を拠点とするビジュアルアート組織です。当館のビジョンは「A world where closer connection with art enhances life(芸術との密接なつながりが人生を豊かにする世界)」です。このビジョンは、当館があらゆる人々に芸術への扉を開き、アイデアと想像力を刺激するための取り組みを行うことで実現されます。

「The Past for the Present(過去は現在のために)」というプロジェクト名に明示されているように、当館の中心的存在意義は「Bringing art to life and life to art(アートをライフに、ライフをアートに)」です。当館にとって重要なのは、当館コレクションが利用者にとって意義があること、過去の作品が今日それを見る者にも何かを語りかけることです。当館コレクションが、ただ存在するだけで価値があるという考えでは不十分なのです。どういう人が来館し、どういう人が来館しないのか、利用者の幅を広げるにはどうすればよいか考えるときは、この姿勢が特に重要です。言うまでもなく、これに当組織の存続がかかっています。創立200年以上にわたる当館ですが、今後さらに200年存続するには、利用者にとって、特に若い世代にとって意義のある存在であり続けなければなりません。

利用者について、つまり、どういう人が来館し、どういう人が来館しないのかを考える場合、当館は特に地域住民を意識しています。対象はロンドンの3つの自治区(特別区)、サザーク、ランベス、ルイシャムです。当館はサザーク区にあり、ランベスとルイシャムは隣接する自治区です。これらはロンドンで特に人口の多いエリアで、多様な若年層が人口に占める割合が高く、当館はこの層を利用対象者としています。このエリアは人口の49%がグローバルマジョリティ(非白人)ですが、当館が2021年に利用者に関する調査をしたところ、当館の利用者を占めるグローバルマジョリティはわずか9%でした。また、0~19歳の子ども・若者が自治区の人口の21.8%を占め、住民の39%が20~39歳にもかかわらず、利用者のプロフィールを見ると、それぞれ10%と20%に過ぎません。

どうすれば当館コレクションを若年層の利用者にふさわしい、意味のあるものにできるのかを探るために、当館は「The Past for the Present(過去は現在のために)」というプロジェクトを開始しました。

これは、キュレーター業務、教育活動、エンゲージメントの各チームが共同で実施したプロジェクトでした。

近隣コミュニティに直接働きかけて当館コレクションの魅力や価値を認知してもらい取り組みが、過去には単に美術館の「教育」面の役割と見られることがありました。そうならないことが当館にとってまさに重要です。

Participatory Action Research, PAR(参加型アクションリサーチ)

本プロジェクトは、PARという調査手法を用いて利用者とのつながりを築くことがねらいでした。まず地域住民にPARのトレーニングを受けてもらい、有償のリサーチャーとして採用しました。そして当館とリサーチャーが協力して調査セッションを実施し、地域の多様な声を吸い上げて理解を深め、具体化することに取り組みました。その後、調査結果に基づいて一連の作品やプロジェクトを委託しました。

PARとは、特定のトピックや問題に最も影響される当事者を、調査プロセスの主体(コミュニティリサーチャー、またはピアリサーチャー)にしようとする系統の手法を指します。コミュニティリサーチャー主導の調査となるように、PARでは次のことを追求します。

- *権威者がもたらす研究知識と、権威を持たない人々がもたらす過小評価される知識との間にある序列のバランスを見直す。
- *調査の質問や方法を改善して特定の場所、状況、コミュニティに適したものにする。
- *コミュニティの多様な集団から異なる視点を引き出す。
- *人と組織の関係を強化する。
- *意思決定者がリソースを総動員して、サービスを受ける人々とコミュニティの現実と根差した解決策を実行できるように、裏付けとなる根拠を提供する。

このタイプの調査は共感的で、多様な意見が集まり、社会参加型です。このアプローチは当館の変革の力になると分かりました。なぜなら、調査によって幅広く多様な視点と経験が集まり、それが当館の活動に有益なヒントになり、誰にとっても有意義な体験を創造することにつながるからです。

長年、当館は「Unlocking Paintings(絵画への扉を開く)」という一連の活動の一環として、コレクションを活用した参加型プロジェクトに取り組んできました。この活動は、コレクションに従来とは異なる、時には驚くべき解釈をもたらし、鑑賞者の積極的な参加を促しました。しかし、こうしたプロジェクトは鑑賞者にとって意義があり、共鳴しやすいものであったとはいえ、まだ美術館側がプロジェクトを企画し、テーマを決めていることに気づきました。そこで、もっと踏み込んで、本格的に利用者の声を当館の活動に反映させたいと考えました。

2022~2024年に実施した「The Past for the Present(過去は現在のために)」プロジェクトでは、PARの専門家組織、Shortworkと協力しました。まず、オープンデー形式のアプローチで9名の参加者を募りました。採用された9名は、当館が優先する3つの自治区のいずれかを代表する住民で、チームの過半数は35歳未満でした。コミュニティリサーチャーの一人、タラ・オケケが、別紙で本プロジェクトに参加した彼女自身の経験を報告します。

年齢	コミュニティリサーチャー
16 - 24	33.3%
25 - 34	22.2%
35 - 44	22.2%
45 - 54	11.1%
55 - 64	11.1%
65以上	0.0%

表:「The Past for the Present(過去は現在のために)」プロジェクトコミュニティリサーチャー・チームの年齢構成

コミュニティーリサーチチームは当館と一緒に1年間活動しました。チームは、「ドリッチ・ピクチャー・ギャラリーをもっと現代社会にふさわしい意義のある美術館にするにはどうすればよいか」という調査テーマを探求するために、共同作業で調査票と活動フレームワークを作成しました。

調査テーマは、次の3つの領域に細分されました。

- *ドリッチ・ピクチャー・ギャラリーに対するコミュニティーの経験と認知。
- *さらに範囲を広げた芸術文化に対するコミュニティーの経験と認知。
- *地域住民が重視するストーリーや問題は何か。

チームは、このフレームワークに基づいて、22回のコミュニティー・リサーチ・セッションを、合計229名を対象に実施しました。会場は、サザーク、ランベス、ルイシャムのコミュニティーセンター、学校、保健所、図書館、ショッピングセンター、カフェ、コミュニティーフェスティバルなどでした。チームはこの調査を整理して、当館に提言を行いました。

調査プロセスから数々の興味深い提言が生まれ、調査ポスター、調査報告書、3つの新曲として表現されました。

主な調査結果:

- *地域コミュニティーに一貫して積極的に働きかけるエンゲージメントと、それを目に見える形にする重要性—当館のエンゲージメント活動は、確かに取り組んでいるが、利用者に広く影響を与えるものではないと分かりました。
 - *ロンドン南部の多様なコミュニティーをプログラム企画の主要な内容に反映させ、誰のストーリーを語るのかを考えることの重要性。
 - *当館の歴史とコレクションの成り立ちについて、もっと充実した情報をアクセスしやすい方法で提供する必要性。
 - *現実に起きている社会問題や環境問題、そして難しい話題から「隠れ」ないという強い思い、調査結果の表現を借りれば(調査チームが作曲した歌のタイトルでもある)、「Don't be afraid of the difficult(困難を恐れなくて)」に取り組むこと。
- 調査結果の中には、当館がすでに認識しているも、再認識することで変化の推進に役立つものもあれば、新しいものもありました。これらの調査結果は現在、今後の調査計画だけでなく、作品解釈、展示、企画展のテーマ選びにも活用されています。

調査結果から実践へ

1年間の調査活動を経て、調査結果は2024年に1年間のパイロットイベントとして実行に移されました。例えば、ライブプログラム、デジタルコンテンツ、展示などが試行されました。これらはすべて、近隣地区の主要な利用対象者とつながり、さまざまな環境で育った現代の若者の生活にも密接に関連したコレクションであると強調することができました。この活動は、当館に大きな変化をもたらすと同時に、コレクションを取り巻くグローバルな状況とローカルな状況を探る、新しい調査戦略とギャラリー全体のリブランディング(年末までに実施予定)にも反映されました。

プロジェクトの成果

プロジェクトの成果の詳細は次のとおりです。

ライブプログラム:

(発達障がいなどを脳・神経の多様性として尊重する)ニューロダイバーシティに配慮し、くつろいだ雰囲気でのオープニングを含む、無料の家族向けストーリーテリング。家族がギャラリー空間で自信を持ち、各セッション後に館内に長く滞在できるという効果がありました。296名が参加

コレクションから着想を得た新しいLGBTQI+のストーリーを引き出し、発見し、創造する新しい「Out of the Frame(既存の枠にとらわれない)」ツアーと営業時間外の取り組み。LGBTQI+の生き方を目に見える形で肯定し、LGBTQI+コミュニティーのストーリーを共有して多様な性に寛容な安心できる環境をつくるプログラム。226名が参加

アーティストユニットのYara+Davinaによるインスタレーション「ORACLES」。当館が二人に調査結果に基づいたプロジェクト企画を委託しました。Yara+Davinaのインスタレーション作品で当館の一室がオラクルカードのリーディングルームに一変し、ドリッチ・ピクチャー・ギャラリーのコレクションに着想を得たオリジナルのオラクルカードを引いて、

どんなアドバイスや知恵が出るかリーディングをやってみましょうと来場者を誘いました。「ORACLES」は、サザーク、ランベス、ルイシャムの地域コミュニティーグループとの創造的な対話を通して完成しました。Yara+Davinaは、コレクションの絵画がオラクルカードだとしたら、どういう意味になるか、そのグループと一緒に考えました。解釈や一人ひとりの作品との関わり方には大きな違いがありました。2,317名がワークショップ、ライブリーディング、日曜日の無料公開に参加

デジタルコンテンツ:

当館の歴史に命を吹き込む新しいアニメーション。これは、特に近隣コミュニティーのニーズに応えるコンテンツを制作し、当館とその歴史に対する認識を変える機会になりました。ファミリー層や30歳以下の若い世代との関わりが増え、「Open Art」のような将来のプロジェクトや最近の「Soulsapes Late」のような一段と斬新なプログラム企画への道筋をつけました。これまでに合計13,000回視聴、730の好評価

評価

プロジェクトのインパクト評価を独立した評価機関に委託しました。主な評価結果は次のとおりです。

- *PARのトレーニングを受け、調査を実施したコミュニティーリサーチチームは、コレクション、当館、コミュニティーへのエンゲージメント(結びつきや貢献意欲)を深めた。
- *ドリッチ・ピクチャー・ギャラリーが自分のような人を歓迎する場所であると思うかという質問に対して、コミュニティーリサーチチームは、任務を完了する頃には、そう思うと回答する人の割合が増えた(当初の75%に対して100%がそう思うと回答)。同様に、ギャラリーとのつながりを感じる人の割合、コミュニティーとのつながりを感じる人の割合も増えた(それぞれ0%から80%、62%から100%に増加)。
- *コミュニティーリサーチチームは、自身のスキルも伸ばせたと報告している。特に計画/準備とリーダーシップのスキルで顕著だった。計画/準備を4または5と自己評価した人の割合が当初は50%だったのに対して100%に増え、リーダーシップを同様に自己評価した人の割合は当初の12%から80%に増えた。さらに自信もついたと報告している(当初の12%に対して40%)。
- *コミュニティーリサーチチームがまとめた調査報告書は、プロジェクト2年目の近隣コミュニティーにとって意義のあるパイロットプログラム企画に反映され、一定の成功を収めた一家族向けストーリーテリング来場者の58%、「Out of the Frame」参加者の82%、「ORACLES」来場者の91%が、自分の人生や経験とのつながりを見いだしたと思うかという質問に対して、「そう思う」か「強くそう思う」と回答した。
- *「The Past for the Present(過去は現在のために)」プロジェクト2年目のプログラムは、通常より幅広い利用者を当館に引き付ける成果も上げ、利用者の内訳が近隣自治体の年齢構成や民族構成に近づいた。利用者の年齢が若くなり(34歳未満が34%、2022/23年の平均は20%)、より多様になった(非白人が28%、2022/23年の平均は13%)。

次のステップ

今後は、「The Past for the Present(過去は現在のために)」プロジェクトから学んだことを、さらに当館プログラム全体に組み込みたいと考えており、これが今後数年間の戦略計画の重要な一部を成しています。それは、さまざまなレベルで当館の利用者、コレクション、芸術プログラムについてどう考えるかに影響します。

これからも利用者の声を大切に視点に基づく取り組みを行い、それを当館の活動全体に根付かせ、探究していきたいと考えています。また、新しい家族向けや屋外芸術の計画を立案して、若い利用者とのつながりを築き、コミュニティーリサーチチームの調査結果を踏まえた美術館運営を推進していきます。

オープンで寛容な方法で若い利用者や地域の利用者の声に耳を傾け、その声に基づいて行動し、わずかでも何か違うことを試みる準備を整えれば、既存の利用者と少数派利用者の両方とコレクションとの間に新しいつながりを築くことができます。その一環である今回のプロジェクトを通して、若者のための空間をつくることは、当館にとって障壁を取り除く上で不可欠です。また、「Bringing art to life and life to art(アートをライフに、ライフをアートに)」という当館の存在意義を達成するためにも大きな役割を果たします。

【発表趣旨】「過去は現在のために(The Past for the Present)」 —コミュニティ・リサーチャーの視点から

タラ・オケケ（英国）体調不良のため欠席

ジェーンさん、「The Past for the Present」プロジェクトの全体像をダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの立場から報告していただき、ありがとうございます。

ロンドンでフリーランスのライターとリサーチャーをしておりますタラと申します。ここ数年は、家庭内のデザイン原則から、公共の場で注目される展覧会まで、あらゆるものについて、『BBC Culture』『Frieze』『ICON』など芸術文化分野のメディアに記事を書いてきました。

また「The Past for the Present」のコミュニティ・リサーチャーの一人でもあります。

はじめに

私はいつも芸術を愛してきました。ロンドンのような都市に住み、そこで育ったことは特に幸運だと感じています。数年前にグレーター・ロンドン・オーソリティ（大ロンドン庁）が実施した調査によると、ロンドンには200近い美術館・博物館があり、そのうち11館は国立です。ギャラリーは約800軒あります。美術館・博物館やギャラリーの内外を問わず、街の至るところに数え切れないほどのアートシーンがあり、じっくり見たり、解き明かしたり、あるいは参加して心を豊かに満たす経験に事欠きません。街の中心部や周辺には世界中の影響や慣習が交錯しています。さらに、ロンドンの大半の美術館・博物館やギャラリーだけでなく、映画館、劇場、主要コンサートホールなどの文化施設も、25歳未満の若者には割引チケットを提供しており、芸術に誰もがアクセスしやすいことの重要性がますます強調されるようになってきました。

とはいえ、このアクセシビリティは重層的な概念です。美術館・博物館やギャラリーの入場料が、多くのロンドン市民、特に若いロンドン市民にとって障壁であることは間違いありません。しかし、文化的な場へのアクセスを妨げてきた問題は他にもあります。私自身、自分の外見や振る舞い、アイデンティティのせいで、もっと正確に言えば、他人がこういう外見や振る舞い、アイデンティティの人はこうだと決めつけることにより、一定の空間では落ち着かない気持ちになりやすいことを知っています。ロンドンの路上で黒人青年が人種差別主義者の暴徒に殺害され、公式調査の結果、ロンドンの警察も「構造的に人種差別主義」であると判明した事件がありました。最近までそういう問題が長い影を落としていた環境で私は育ちました。あらゆる信条や肌の色の若者に対して、LGBTQ+コミュニティの一員であること、特にゲイであることは「受け入れられる」と教えることが法律で禁じられていた時代に育ち、学校に通いました。要するに、今いる空間や環境は私にふさわしいのかと常に考えながら育ったわけです。芸術は大好きでしたが、芸術文化産業は私を愛してくれるのだろうかと思っていました。正直に言えば、今も疑っています。

芸術は寛容を促し、世界観の構築を助け、古い問題の新しい見方を提供する役割を果たせます。しかし、芸術で何でも解決できるわけではありません。人が自ら、寛容であろう、それを維持しようと決めなくてはなりません。人が今とは違う世界を築こうと決意するには、何かひらめきや確信のきっかけが必要です。そして人が想像を新たに

するには、あるものがもはや目的に合わなくなったと判断しなくてはなりません。芸術は、そして芸術作品の収集や芸術制作の促進を行う空間は、今述べたような決定を下すための条件をどうすれば整えることができるでしょうか。

応募した理由

このような問いを念頭に置いて、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーのプロジェクト「The Past for the Present」のコミュニティ・リサーチャーに応募しました。この転機については、募集を私に知らせて応募を勧めてくれた同ギャラリーのSenior Learning and Participation Manager、ケリー・ロビンソンに感謝しなければなりません。

応募前に同ギャラリーに行ったのは一度だけです。名高い2019年の「Rembrandt's Light (レンブラントの光)」展を見に行きました。驚くほど美しく、キュレーターの偉業だと思いました。ただ、プロジェクトの対象であるロンドン南部の3自治区、ランベス、ルイシャム、サザークには住んだことがありませんでした。ですから、リサーチャーになるからには求められるであろう知識や洞察力が自分にあるか不安で迷いました。けれども、私は2020年に、大英博物館が企画・管理する入門レベルの文化遺産実習制度「Museum Futures」を通じて、ホーニマンミュージアム・アンド・ガーデンズ (Horniman Museum and Gardens) の研修生になり、そのコミュニティ向けプロジェクトのうち、「696」「Nigeria60」という2件のプロジェクトに取り組んだことがありました。ホーニマンはルイシャムにあります。また、応募当時には、私はブリクストンに拠点を置く社会史プロジェクト「81 Acts」のコミュニティ助成金交付フォーラムの一員として任命されたばかりでした。ブリクストンはランベスにある地区です。そういうわけで、ロンドン南部、特に3つのプロジェクト関連自治区のうち2つで働いたことがありましたが、応募当時にも働いていたので、ロンドン南部のユニークで絶えず変化する文化をこよなく愛し、親近感をもっていました。

私は、企業の利益ではなく、コミュニティの声を丁寧に吸い上げるリサーチスキルを伸ばす機会を心から求めていました。ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーに新鮮さを感じたのは、リサーチャーを地域に投じることを、どうすれば展覧会のチケットを買ってくれるのかと地域住民に尋ねるためではなく、それとはまったく対照的に、地域住民の気持ち、つまり、何に喜び、何に尻こみするのかを把握する手段として考えている点でした。

さらに、芸術文化ライターという立場で、批評家然とした、ある種、権威ある側から一般の人々に向けて展覧会を評価する仕事を中心にしてきた私は、「The Past for the Present」に参加することで構造をひっくり返し、批評家としての声から離れてみることに価値を見出していました。結局のところ、私が心をひかれたのは、コミュニティ・リサーチャーの一員そして地域のリサーチ参加者の一人となって多様な人々のコミュニティに身を置けば、人々がダリッチ・ピクチャー・ギャラリーの何が自分たちの文化生活、ひいては地域に最も訴えかけるか（逆に訴えかけないか）を評価・分析し、私と共有することに進んで協力してくれる様子が思い浮かんだからです。そして、結成されたコミュニティ・リサーチャー・チームと地域コミュニティが対話するというプロセスを、意義ある活性化につなげ、誰にでもアクセスできるものにするために自分の役割を果たせたらと本気で願いました。

トレーニングで学んだこと

ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーは、ロウィーナ・ヘイ博士が主導するリバプールの社会調査支援組織、Shortworkに提携し、参加型アクションリサーチ(PAR)というタイプのリサーチのトレーニングを依頼しました。

PARは、リサーチャーとリサーチ参加者の協力的な意見交換の重要性を強調する定性的調査手法です。PARの中核を成すのは、リサーチャーとして向き合う相手、すなわちリサーチ参加者が、それぞれの人生の専門家であり、そのような専門家としての知識や経験は高く評価すべきであるとするアプローチです。人の経験や認識、人に影響を及ぼす問題をすべて考慮に入れるのです。その結果、PARは、コミュニティー主導の調査の柱として、また持続可能な開発戦略の分野で存在感を高めてきました。

私はロウィーナが率いるチームからPARの基礎を学んでトレーニングを受けることを、大いに楽しみました。私たちはギャラリーで何度も半日と丸一日のトレーニングセッションに参加しました——ありがたいことに、たっぷりの軽食付きで(!)。そして数か月の間に、コミュニティーリサーチャーに選ばれた私たち9名のチームは理想的な協力関係を築き、自信をつけました。

もちろん、時には神経を張りつめて頑張ることもありました。例えば、スライドの写真にあるHフォームやフォースフィールド分析のようなPARの各種ツールを身に付けなければなりません。さまざまなツールを使いこなしながら有能に自信をもってリサーチセッションを進行するだけでなく、リサーチ参加者から質問された場合に各ツールの妥当性や適切さを説明できるようにするためです。他にも、面識のない地域住民とセッションを行うケースが大半になることを心得る必要がありました。それは、(リサーチ参加者の)データ保護や(リサーチ参加者、コミュニティーリサーチャー双方の)全般的な安全性などが問題となって骨の折れる仕事になる可能性を伴っていました。

さらに、PARは経験的知識と相互信頼に大きく依存しています。Shortworkから教わった具体的なフレームワーク内で、PAR活動を行うコミュニティーリサーチャーが採用できる役割は3種類でした。その1つは「妨害対抗者(anti-saboteur)」です。不安定なダイナミクス(集団力学)に気を配る役割で、リサーチの場面でいえば、リサーチ参加者どうしのダイナミクス、あるいはリサーチ参加者と活動のファシリテーターやオブザーバーを担うコミュニティーリサーチャーとの間のダイナミクスのうち、リサーチ活動の進捗や人々の参加意欲を妨げる懸念があるものに対処します。妨害対抗者は気楽に引き受けられる役割ではありません。もちろん、ファシリテーターやオブザーバーも時にはそうですが、その役割を引き受けると、PAR活動フレームワーク内の相互作用がいかに複雑になり得るかを思い出させてくれます。

セッションのファシリテーターとして学んだこと

この複雑さは、「The Past for the Present」のPARセッションを進行する上で常に大きな特徴だったことはほぼ間違いありません。

準備段階で何か決めることは簡単でした。例えば、私たちコミュニティーリサーチャーは9名いて、プロジェクトの対象は3自治区なので、3グループに分かれて、各グループが1自治区に限定してセッションを行うことに決めました。

ところが、当日になればあれこれ変わる可能性があるものです。コミュニティーリサーチャーがリサーチセッションを

開催するために会場を予約しても、それがコワーキングスペースであれ図書館その他であれ、予約が遂行されないかもしれず、現にそうなったこともありました。また、会場によっては他よりも交通量や客足が多く、少し足を止めて考えを聞かせてくれる人を何人くらい説得して確保できるのか、予測が非常に難しいこともありました。

簡単な役割ではありませんでした。適応力が求められます。私はランベス拠点のグループ担当でしたが、地域区分としてはサザークにある、ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーでのセッション進行を一度手伝ったこともあります。金曜日の家族向けイベントでのセッションでした。私にとっては、失敗だらけではありましたが、素晴らしい経験でした。こうした失敗やミスもプロセスの一部として受け入れ、建設的な批判にはオープンでいなければならないと学びました。

決定的に重要な学びをもうひとつ挙げると、リサーチ活動やリサーチの問いを通してリサーチ参加者から集める洞察は多様で、互いに矛盾するものもあるという点です。繰り返しになりますが、矛盾する洞察はPARの性質上、必然的な特徴になるでしょう。ですから、これを容認するだけでなく、むしろ歓迎するくらいの姿勢になる必要があります。コミュニティー・リサーチャー・チームとして、私たちは「Don't be afraid of the difficult(困難を恐れないで)」というフレーズを思いつきました。これには同僚のカラム・ターナーの手によって、みんなで歌える素敵な曲が付けられました。

さらなる振り返りと提言

ジェーンも私も、お集まりの皆様と「The Past for the Present」に取り組んだ私たちの経験を話し合う機会にとっても感謝しています。

ここ数週間、私自身の健康状態が下り坂になっていることもあり、美術館・博物館やギャラリーが私たちの気持ちに及ぼす影響について、つまり、人を穏やかにする、幸せにする、健康にする、人とのつながりを感じられるようにするという役割を果たせるのかについて、さかんに考えてきました。これは、リサーチセッションでも繰り返しテーマになった問いです。緒方泉さんが日本で素晴らしい研究をされてきた分野であることも存じています。

美術館・博物館やギャラリーが現在そういう存在であると思いたいですし、過去には確かにそうでした。しかし、今後もそうであり続けるためには、本業が学生であれキュレーターであれ、芸術文化を愛する私たち皆が心を開いて、人々が何を体験しているのか、何にアクセスできて何にアクセスできないのか、それはなぜかをめぐる、困難で複雑な対話に向き合う必要があります。

ありがとうございました。

【事後アンケート】

質問 以下の①～⑤について、感想 (気づきや発見、勇気づけられたことなど)をお聞かせください

11

①

英国、ジェーン・フィンドレーさんの事例報告

*色々なトレーニングの中で、様々なスキルを身に付けてもらったり、時にはメンタリングにも対応する。またお互いに知らなかった人同士が、個人の強みを発揮しながら、絆を強めてワンチームで成長出来たという素晴らしいお話を聞かせていただきました。オラクルカードにも、非常に興味をひかれています。

*ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーという創立200年を誇る世界初の公立美術館という歴史ある素晴らしい美術館で、今後の200年に何を残すかという課題を持って取り組んでいった事に驚きというか、感動しました。過去を守るではなく未来への取り組みと、未来に必要な人材はこれからの若い人ということでスタッフを育成していくことに共感するとともに勇気づけられます。

*何よりも、オラクルカードの取り組みに感激しました。鑑賞の前に行く“本プロセス”によって、その後の鑑賞時にその絵を探すという行動が生まれたとお聞きしました。行動変容が起こると共に、ギャラリーの作品が自分事になっていることがよく分かります。

*ダリッチ・ピクチャー・ギャラリーはいわゆるマスターピースを所蔵する、歴史ある公的な美術館と思いますが、3つの自治区に対象を絞り、地域のお祭りやコミュニティセンターなどへの出張も行っているローカルな活動があるとのことで意外性がありました。ロンドン南部の非白人が多い地区の特性を考慮した上での若者の参加を促す手法は、高収入、高学歴に偏りがちな日本の美術館の利用状況にも生かせるように思いました。ストーリーテリング(素話)は、日本では一般に難しいように思いますが、イギリスの住民は語れる人が多いと思いますが、「安心して」語れる場づくりをしていることが素晴らしいと思えました。

*予算をかけて、外部の人材を雇って行う参加型のアクション・リサーチという考え方、動きに今まで触れたことがなかったので大変新鮮に映りました。また、オラクルカードが気になりました。日本ではアートカードを取り入れている美術館が多いので、アートカードの利用方法の一つとして活用できるのであれば、取り組みやすそうにも感じました。もう少し具体的な運用について知りたいです。

若者やこれまで美術館に来ていなかった層を取り込むために、外部の人材によるリサーチやアクションプランの設定など、すぐに実践は難しいですが、こうあるべきという考え方を一旦取り除いて物事を考えることの大切さに気づけました。

*オラクルカードの利用により、来館者と自分に合った絵画を手にとって近づけるという発想の素晴らしさが印象的でした。いかに近づくか。近づけるか。DPG職員と、来館者の個別の解釈と共感、理解からの新たな発見があったように感じました。

*今回は特に「誰のための館なのか」を「地域住民」とし、地域住民とは誰なのか、どんな人たちなのかを割り出すところからはじまり、通常どの館でも行われているようなアンケートなどの安易な方法に寄らず、リサーチャーを採用して実践する本気度がすごいと思えました。

*博物館を若者と作っていくことを一つ一つ丁寧に取組まれていて、「research」という形を取られていたことも印象的でした。それを取りまとめることは大変だったと思いますが、楽しそう、という印象を受けたように、皆さんが楽しんで取組まれていたのではないかと思います。そうした環境づくりも参考にしていきたいです。

*報告されたプログラムは、日本の公立博物館ではなかなか思い切つてできないようなこともあり、とても刺激的に感じました。個性豊かなコミュニティ・リサーチャーとの活動はコンスタントな研修もある分、具体的なゴールが見込める一方で、日本でよくあるボランティアとは違った

難しさもありそうだと思います。しかし、表面的だけではない、より深い市民や地域との連携にもつながる事例だと感じました。また、オラクルカード使った鑑賞支援プログラムも、とても興味深く、実際にやってみたいと思いました。

*ユースが自身のコミュニティで美術館について調査を行い、提言すると言うのは面白いアプローチだと思いました。ユースにとっても、自身のアイデンティティーを生かした、つまりアイデンティティーを肯定的に受け入れられる活動であり、美術館にとっても、彼らが加わってくれることで貴重な情報(コミュニティの現状)を知ることができて、双方にとって良い取り組みだと思います。美術館の教育普及という現場にいて、参加者にとって良い体験を提供しようとする参加者数を絞る必要があり、少人数にしか届けられないもどかしさを感じることもありますが、このプログラムでは9人の参加者には手厚くトレーニングを行う一方、彼らを通じて幅広い人たちにリサーチする枠組みとなっているのも良いと思えました。

本プロジェクトはShortworkというリサーチを専門とする組織と提携して行っているのもなるほどと思えました。今回のような質的調査の分析をきちんとメソッドに則って行うのは、時間もかかりますし、なかなか手をつけられない業務でもあります。こうした団体がまずあるということ、それからこのShortworkと組むことで、ユースたちが行った調査がきちんとした提言につながれていると思えました。

②

英国、Kids in Museumsの活動報告

*若者たちの博物館に対する日常は、日本の来館者とまさに共通する部分があると思えました。博物館が若者をどう引きつけるかに関しては、私達も実践できる余地がまだまだありそうです。

「報酬」というキーワード、全体的にも出てきましたが、モチベーションをあげるためにもやはり現実的には必要なことですね。

*参加という言葉より「参画」という言葉が合う活動だと思えました。マニフェストはぜひ読んでみます。25歳までが入ることで大学生も積極的に活動でき、大人に管理されない基盤づくりができている印象を受けました。

*スライドを交えた報告の中に「イングランドでは、16歳から24歳の若者のうち、平均的な年では60%から70%が美術館を訪れない」という報告を聞きました。その訪れない理由がリアルで、コストと実用性などの突いていると思えました。大人となっていく若者に対応していく事が、将来にわたり大切なことだということがよく理解されていると感じました。

*ロンドンに行くと、日本に比べて美術館が市民生活に根付いていると感じるのですが、そんな中でも「美術館に歓迎されていないと感じている若者」たちが存在すること、それを解消するべく活動している人々がいることに、少々驚きました。トライアンドエラーを是とするチャレンジングな姿勢が、眩しかったです。

*運営面で、予算のことにふれていただいた際に、イギリスと日本では事情が異なると思いますが、それでも、素晴らしい活動は予算を獲得していけることを示していただいたように思いました。何より、賛同する仲間が多い、というのは、素晴らしい活動である証であります。目先のやりくりを目指してではなく、仲間を増やしながら意味ある活動を目指していきたいと思えます。

*そもそも、参加されている方が大学に通うような若い方が多く、驚きました。博物館に所属していないとなかなか内部のことが見えないので、私自身を含め、私の身の回りでは、博物館である程度経験を積んだ後に初めて、どんな人が博物館に来ていないのか、子どもに博物館に触れさせるにはどうしたらいいかという課題を目の当たりにしているように思えます。その点で、意識の高さの違いを感じ、驚きました。

また、動画の中で触れられていた、多くの若者が博物館を自分とは関心がないものと感じているという言葉は、日本でも通じるところがあると思うので、私自身も真摯に受け止めてはいけなかったと感じました。どのような取り組みができるか、今回の報告も参考に、博物館の狭い世界を超えた視点からも考えてみたいと思えます。

*ミュージアム内とは別にこうした組織があることに興味を持ちました。また、決定権をユースのメンバーに持たせて様々な活動をされているのを拝見し、こういった組織が日本でもあるのかな、と思えました。

3 質疑応答(ジェーンさん、アリソンさん、カリスさんの回答など)

*カリスさんの「Museumはボランティアに優しくない」「ボランティアは難しい」に、海外でも抱える問題は同じだと共感しました。

だからと言って嘆くだけではなく、ユースサミットに向けて「成果物」を得るために持っていき、エキサイティングしたというお話を聞いて、私も見習いたいと思いました。まさに実行力の賜物ですね。

また工作は人との交流につながると言うお話も、なるほどと感じました。

「博物館が若者に歓迎されていない」ことには、博物館と若者との相互理解が必要である。

どんな場面にも相互理解は必要ですが、私の活動に関しても大きなテーマになりそうです。

また「意思決定」を目指すのは、人(幅広いオーディエンス)のためであり、変革をするというキーワードも心に残りました。

*どの方も美術館の教育活動に真剣に取り組んでおられる様子が分かりました。スタッフ間のコミュニケーションや資金などなかなか聞きにくいことも答えてくださってよかったです。

*美術館には多様なニーズがあるため、情報提供を常に改善していくことが重要である。博物館と若者との距離を縮める方法として、若者と意味のある関係性を作る。若い人たちが自分は信頼されていると感じ、関係を構築させる。などの回答が印象に残りました。

*活動資金のところが、研修機会の無償提供も入ることなど興味深かったです。美術館でのトレーニングの成果が他で通用するスキルを育て、フリーランスとして働ける力量の形成も想定されていて、目先のプロジェクトの成功だけでなく、若者の進路を支援するという姿勢も素晴らしかったです。学生のカリスさんは活動をもとに卒論を書かれたとのことですが、このような団体があると、美術館側が個別対応をせずに学生を受け入れやすいと思いました(団体側で研究倫理やマナーなどの最低限のインストラクションをしてもらえそうなので)。

*ジェーンさんの「若者の愛をミュージアムに」という思いやりの言葉とても素敵ですね。アリソンさん「キッズミュージアムなどの活動を通じて若者のバリアを取り省く」という言葉が印象に残りました。

*アリソンさん、カリスさんの、とにかく楽しそうに受け答えなさる様子が印象的でした。誇りを持って、失敗を恐れず(失敗という概念が無さそう)、楽しんで活動に取り組んでいらっしやるのが伝わってきて、こちらまで笑顔になりました。

*これまで「博物館は標本ありき」という認識が一般的だったと思いますが、アリソンさんが「博物館は人ありき」と仰ったことに励ましをいただいた気分でした。まだ日本では、「標本ありき」の考え方が強いと思います。そういう面ももちろんあるとして否定しませんが、「人ありき」であることは今の博物館活動に欠かせないマインドだと思います。イギリスの事例に益々学んでいきたい、と思いました。

*ジェーンさんもアリソンさんも、ユースの意見を尊重しつつも、彼らが困らないように研修やサポートをしっかりされているのが印象に残りました。

*イギリスの若者がミュージアムに行かない理由の一つに、帰属感がない、自分たちに関係のあるものと感じない、という声があるということが印象的でした。これは自分の館の地域にも当てはまると思います。私個人も現在働いている館は自分の地元ですが、高校までは美術館に行く発想がなかったし、図工の授業も嫌いでした。地域の人々が自分事ととらえることができるような展示を実現するために、どのようにすればいいか考えていきたい。

*クラフトセッションにおいて、ものを作ることが友達を作るにつながると言う言葉が印象に残りました。この点は今後意識していきたいです。ミュージアムと若者の距離を縮め、相互理解を促進し、「意味のある関係性」を下から積み上げていくことが重要という指摘に共感しました。さまざまな活動を進める上で、ほかの主体を「コントロールしすぎないこと」「任せる」が大切という指摘は、改めて重要だと思いつつも、言葉でいっほど簡単ではなく、皆さんの力量の高さに尊敬の念を抱きました。

*緒方先生からの豊富な質問があり、より3名の活動について詳しく知ることができました。

全体を通して感じたのが、外部からの提案があるからこそ、博物館が新しくチャレンジできるのではないかとことです。「意思決定者」のお話もありましたが、博物館では職員が新しいプロジェクトを行いたくても難しい状況もしばしばあると思います。DPGのリサーチャーも、Kids in Museumsのユースメンバーも、地域住民や若者の意見を客観的に把握し博物館に提出することで、博物館の新しい挑戦のきっかけになることができていると思います。自館でも博物館をよりよくするにあたって、積極的に外部の意見を収集することが大切なのではないかと感じました。

*みなさんが最後に語った夢は様々でしたが、誰もが、若者たちを理解し、分かち合い、ともに歩んでいける存在になることを望んでいるように感じました。みなさんの「若者の力でミュージアムを変えたい」という熱い想いに、心打たれるものがありました。

*私の心に特に響いたのは、Carysさんの「博物館が若者を求めている」という指摘でした。これは博物館のアクセス不全と高い入館料という点にあり、若者料金の導入などといった配慮が必要であるという点はシンポジウムの中で指摘されていました。このような状況に対し、ジェーンさんは博物館のこれからの維持のために、若者に博物館に来る重要性を指摘していました。

私は博物館に来る理由が、展示を見るだけではなく別のところにもあると考えます。例えば、九州国立博物館ではバックヤードツアーを開催しており、文化財保護のための活動や博物館の建築について説明しているが、これは学芸員志望の人だけでなく、建築関係の職に進みたい人にとっても有益な情報です。そのため、博物館の文化財を見るだけでなく、そういった側面も積極的に示すことにより、学校の遠足などで博物館を利用する際に、博物館に興味を示す学生も増えるのではないかと考えます。

また九州国立博物館でのボランティア活動を学生として経験してきたこととして、博物館のボランティア制度が、活動回数の多い60歳以上の人達に合わせられているように感じられます。それは、部会によってはボランティアの活動日が平日だったり、活動回数が週1以上と学生には厳しいものになっていた点です。

九州国立博物館では学生部会という部会が設けられており、活動回数は月1回以上で、特に活動方針は決められていないために、自由な活動可能というように学生を考慮した措置が取られています。しかし一方で、他の部会には活動日や頻度が合わないために、仕方なく学生部会に入ることになることで、思ったような活動ができていないとは思えません。以前、ボランティアメンバーに博物館でのボランティア活動を始めたきっかけについて聞いたところ、博物館が好きで応募したものの、具体的に何がしたいかまでは考えていないという人がほとんどでした。今回のシンポジウムより、若者が博物館活動に参入することについて、博物館がその意義をもう一度考え、それを踏まえて学生がどのような活動をしていくべきかについて考える必要があると考えました。これにより、若者にとってアクセスしやすい博物館づくりにつながっていくと思います。

4

今回の国際シンポジウムをもとに、 今後自分たちの活動で取り組んでみたいこと

*私自身は放送大学の学びから、九州産業大学での博物館実習、みんぱくボランティアとつながりましたが、背景にはソーシャルワーカーの経験などもあります。学びを活かすために、これからも色々なことを学び続けようと思います。

*まずは、オラクルカードのようなプロセスを天体観察会の中で導入できないか、検討してみたいです。天体観察会ではいくつかの天体、星座をご案内します。事前にプラネタリウムなどで今夜の星空を案内することもあります(南阿蘇ルナ天文台ではその導線がプログラムされています)、通常の天体観察会は現地に集合した後、すぐに望遠鏡で星を見ることが多いです。今夜見える天体や星座のカード札から3つ選び、そのカードの天体・星座について語った後に、実際に天体観察ができれば、また新しい発見や行動変容が生まれるような気がしました。実際に、天体・星座が描かれているカードを持っているため、早速それを使ってテストを試してみようと考えています。

*芸術文化活動に関心がある若者や中高生が、美術館を利用しやすくするようなアウトリーチ活動の調査研究をしていきたいと考えています。

*PARをすぐに実践することは難しいので、まずは来館しない人も含め、市民の声を聴ける仕組みを考えてみようと思います。内部の人間だけでどの程度のことができるかわかりませんが、可能な限り、これまでの枠組みを一旦置いて、美術館にある作品を活用して、ものづくりなどのワークショップをとおして、人々が交流する機会を創出し、新たな来館者を増やすことについて考えてみたいです。また、若い世代を含め、市民の協力を得ながら美術館の運営を進めていけるような取組、単なる労働力としてはないボランティアの運用について考えていきたいです。どこからできるかわかりませんが、やってみながら修正していければよいと考えています。

*様々な事業や活動の中で、対象者となる人との考え方は共通していることもあれば、そうでないこともあると思います。また、その熱量も様々です。今後は、多様性の中で変化していく社会において、DPGの活動などを参考にしながら、人が感じる魅力や関心について考えていきたいと思っています。今回の国際シンポジウムは、これからの仕事への向き合い方や地域の地域活動にも「課題を見つけ、その

適応を考える」という点で大いに役に立ちました。

*Bringing art to life and life to art

実は今まさに「日常にアート」を形にする事業を新たにスタートしています。その一つとして、オラクルカードではありませんが、トランプ的な「アートカード」も作っています。私の場合は美術館という公共の場所ではないものの、思いがけず目指すべき共通性を発見して嬉しくなりました。

*自分が運営する、学生運営スタッフ団体MusaForum(ムーサ・フォルム)のメンバーにも、「博物館は人ありき」であることを共有していきたいです。「博物館浴」をはじめとする博物館の新たな活用法についての考え方が、最近では自分の周囲でも浸透してきたように感じています。人から人への広がりや、自分自身も楽しみにしながら、博物館活動に取り組んでいきたいと思っています。

*まだ具体的なアイデアまでは思い浮かんでいないのですが、まずは、勤務している博物館の中だけでどうにかする、というような視点を一旦捨てて、より広い視点で博物館の課題の解決方法を考えてみたいと思います。また、いつか、既に取り組まれている博物館もありますが、子どもや若い方と一緒に博物館や展示を作るプログラムにも取り組んでみたいと思います。

*緒方先生から共有いただいた音源リンク先に行き、改めて曲を聴きました。「Don't be afraid of the difficult」は、私も口ずさんでみようと思います。

*プログラムを開発する際、その対象となる方に職員がヒアリングをしてきましたが、The Past for the Pastのように、その段階からユースに関わってもらうのも良いかもしれないと思いました。またshortworkのような組織が日本にもあるのか探してみたいと思いました。

*シンポジウムはたいへん濃い内容で、まだ消化できていないのですが、私は、若い人たちの関心が博物館から遠のいていることが大変ショックでした。そして、若い人たちが、将来の博物館・美術館に求めていることが印象的でした。どのような展示があるか、どう展示するかよりも、「テクノロジーなしで内省する空間であること」や、「喜び、遊び、マインドフルネスを感じられる空間であること」、「週末のwork experienceが得られる場所であること」など、ジェーンさんの発表内容にもあるように、「館のコレクションがそこに存在しているだけでは不十分」で、何かしら、その人の人生の助けやリフレッシュにつながるような

役割が求められているのではないかと思います。例え大型展覧会が開催されていなくても、フラッと博物館に寄る、そんな役割も果たせたらいいなと思いました。また、ボランティアだけでなく、有償のリサーチャーを採用したことも、参加者にとってとてもいい学びの場になったのではないかと思います。私も、もしチャンスがあれば、そのような関わり方をしてみたいと思います。このように、海外の事例を紹介していただけることが、私にとってはリフレッシュになりました。いただいた知識を温めながら、今後も学びを深めていきたいと思っています。

*私もジェーンさん同様、博物館が長く維持するためには、若者へのアプローチが大切だと考えます。そのために、「博物館を好きになってもらうための活動」というキーワードの下、自分の活動を進めたいと考えてきました。来年度より、箱根から宮城県栗原市にあるくりでんミュージアムに拠点を移すが、そこでは元々子どもの来館者が多く見受けられ、加えて来館者が自由に書き込めるノートがありました。そのため、このノートを活用することはできないかということを考えています。

早期に取り組みたいこととしては、ギャラリートークの実施です。ギャラリートークは、学芸員が展示以外に自分の研究成果を直接社会に示せる場であり、なおかつ展示よりも直接的なものであるため、展示物のことを説明しつつ、来館者からの質問に答えられるギャラリートークが今年中にはできるようにしたいです。内容についても、主な展示物である電車のことに加えて、私の専門である民俗学に絡め、この電車と栗原市の発展に関連させた内容を実施したいです。

さらに、この先実現したいこととして、学校との連携事業とラジオ活用があります。学校との連携事業は、出張授業や遠足などでの学校からの訪問というものがありますが、それらができるようになるように活動したいです。またラジオ活用ですが、これは博物館と人々をつなげる手段として有効だと考えます。ラジオはパーソナリティ対リスナー、またはリスナー対リスナーという関係で成り立つもので、リスナーはメールを通してメッセージを伝え、それをパーソナリティが読むというものです。私は上京して知り合いがほとんどいない環境で生活する中で、ラジオを聞くようになりました。聴いていると、不思議と顔も本名も知らない人と会話をしているようで、普段人に話さないような心の奥底に秘めた言葉を発信することにつながっているように感じました。そのため、ラジオを通して博物館の情報を伝えたり、来館者からの質問に答えたりすることで、より博物館を身近に感じてもらえる人が増えるのではないかと考えています。そういう理由で、私は次の

職場で「博物館ラジオ」の実現のため、そして実現した時には「博物館を好きになってもらうための活動」をキーワードに発信をしていきたいです。

*当館では、地元の高校の美術の教員とある程度関係性があります。まずはここから若い来館者との関係を構築していきたいです。とりわけ当館は大学生以下の入館料を無料にしているため、料金の面でのハードルは低いと思われるのですが、若い人のニーズ(美術館をどのような場所と認めているか、何を求めているか)の把握がまだうまくいっていないと考えられるため、その点に力を入れていきたいです。

*「地域の博物館」に市民の方は何を望んでいるのか、その声を聞く努力をしたいと思いました。名ばかりのアンケートの改善や、博物館の活動に尽力してくださる市民ボランティアからのより積極的な意見の聞き取りなど、すぐにでも変えていけることがあります。いきなり大風呂敷を広げて何かに取り組めるだけの余力は、正直なところ今の当館にはありませんが、それでも近くにいってくださる方、館を利用してくださる方の声を聴き、取り入れていくことはできるはずです。少しずつでも変わるきっかけを逃さないように、日々の活動の中で取り組んでいきたいです。「Don't be afraid of the difficult」、諦めそうになったときはこの言葉を思い出して、困難に立ち向かいたいと思います。

*一つ目は、若者と展示品のつながりを作るプログラムの作成です。展示品に対して全く興味がない場合でも、彼ら自身とのつながりを生み出し、少しでも博物館に関心を向けてくれるようなプログラムを企画したいです。二つ目は自身が発言していくことです。自館では、チームのさまざまな意見を受け入れる雰囲気はありますが、新しいチャレンジについては慎重です。「Don't be afraid of the difficult」の心をもとに、さらに新しいことを提案し、実現につなげていきたいです。

*PARの手法は積極的に取り入れてみたいと感じました。また、クラフトセッション(工作のワークショップ)の意味付けとして、参加者や主催者どうしの関係性の変化を意識していきたいと思いました。「発言力や影響力をもつために行動を」というメッセージは本当に熱いもので、これからも歩き続けながら考え、発信していきたいです。

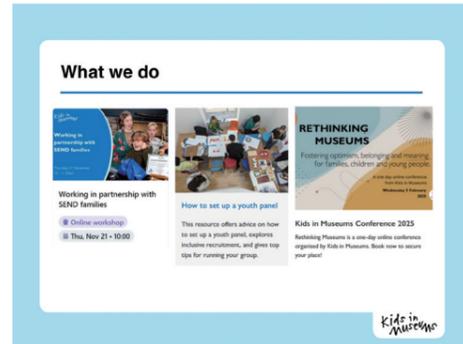
*すぐに活かせるようなことは、具体的に思いつかないのですが、社会参加型の活動をミュージアム発信で行なっていたという希望が持てました。

参考資料

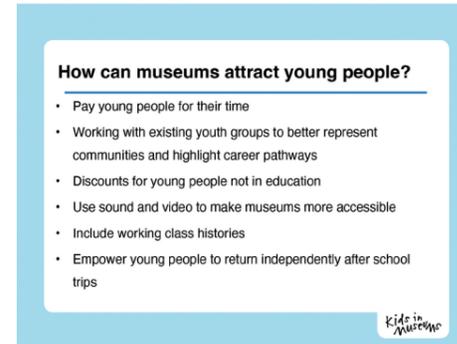
今回の国際シンポジウムのディスカッションに参加した、「Kids in Museums」の活動報告資料です。「Kids in Museums」は、イギリス全土で活動する若者たちが主体的に博物館活動を支援する団体です。



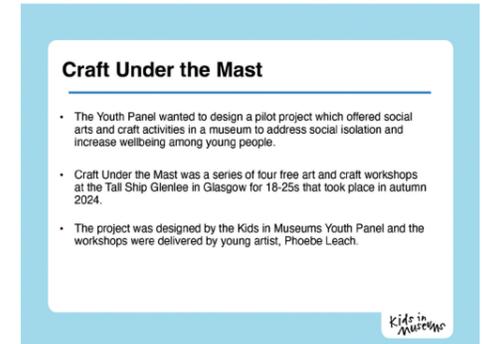
p.01



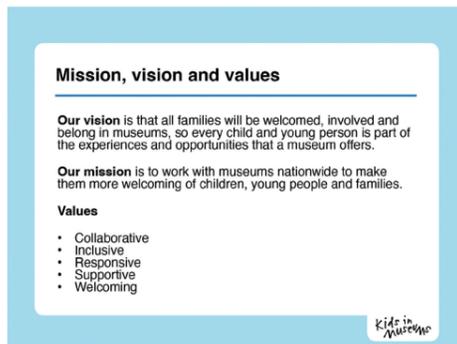
p.05



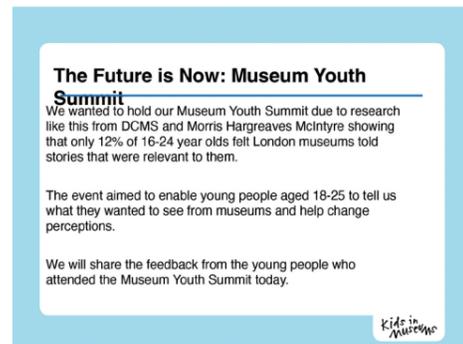
p.09



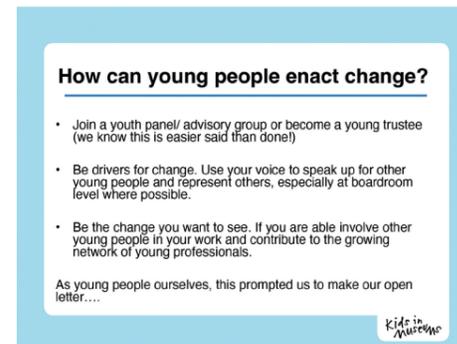
p.13



p.02



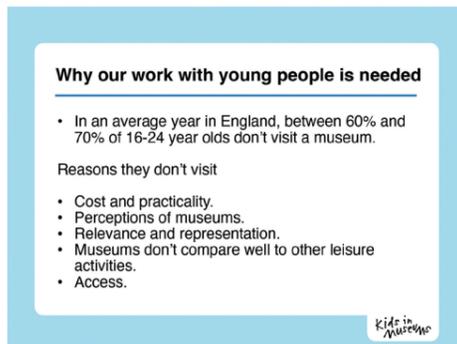
p.06



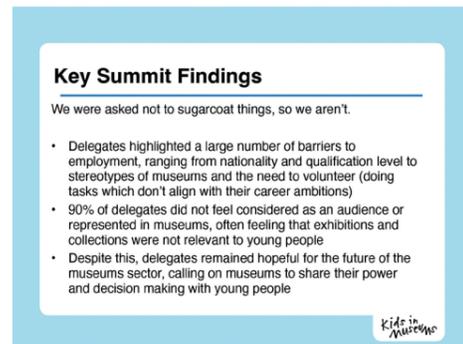
p.10



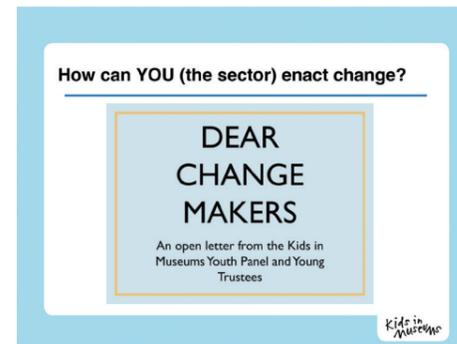
p.14



p.03



p.07



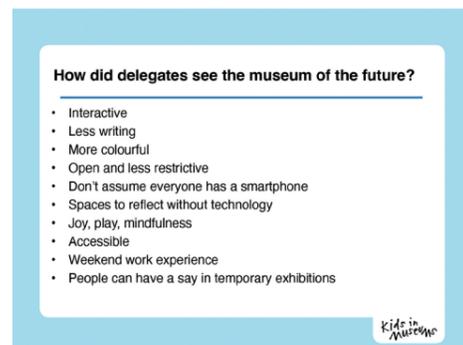
p.11



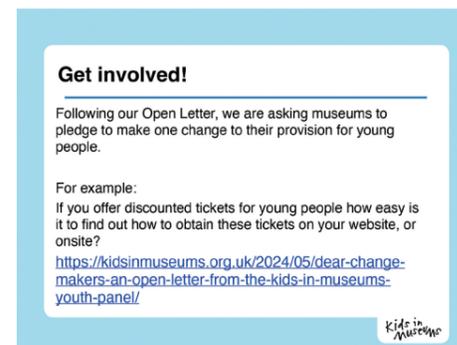
p.15



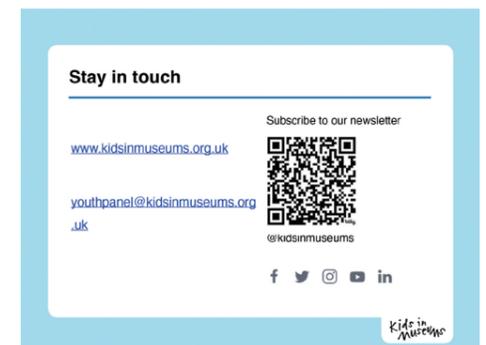
p.04



p.08



p.12



p.16